

330  
88

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5

始



特 232  
420



娘もの云ふた好きとゆた



## 單刀直入

## ●まア知らないわ

あの人は近頃何うしてゐるだらう？ 或日フイと其慶事を思ふた、あの人は真木さんのことである。

去年の暮己れと弟の二人は伊豆の伊東へ旅をした。その時偶然乗り合はしたのが真木さんである。夫婦に花も欺く令嬢を連れられた親子水入りの三人連れ、いつしか此方と言葉を交はし、遂に其の長い道中から旅館までズツと行動を共にした。色々語り合つてゐる裡に此の人は有名な天下の奇行家たることが知れた、趣味は古今に渡つて凡そ變つたものと名の付く物を集めて保存しておくのが無二の楽しみだと云ふ。

僕等はお先さへ失敬して一足先きに伊東から歸つた。その人は猶今年三月までも滞在してゐた。四月櫻の散る頃弟と二人は谷中のその宅を訪ねた限りである。そして今日まで御無沙汰してゐたんだ。一度是非お訪ねしたいと云つて先方も御無沙汰してゐた。

己れは久々で訪問してみよう、斯う思ふて家を出たのは夕頃七時の針を廻つた許りの時であつた。

「御免下さい」と真暗な玄關に立つて己れは案内を乞ふた。「ハイ」と優しい聲が直ぐ奥の方から聞えた、その聲を聞くと同時に「ハ、ア嬢さんだナ」と思ふた。真暗で顔はよく分らなかつたが、出て来た姿のそれで早くも矢つ張り嬢さんだと見當が附いた。

先方も勿論、來客とは知りつゝも其の來客の誰れかは全然見當が附か

なかつたらしい。彼女は慇懃極まる叮嚀なる御辭儀を先づ眞黒なお客さまに呈した、お母アさんの育て方がいゝぞとお客さまたる己れは感心の微笑を一寸湛えて、

「御主人さまは御在宅で御座いますか」と悉皆猫を被つた聲を出す。

「ハア、どなた様で御座いますか」と音聲極めて明瞭、聊かのよどみもない甲種合格聲で、流石はお江戸育ちの嬢さんだ、しつかりした應對振り、秘藏娘としては出来がいゝぞ。

「アノ西川さんと云ふ方が被居いましたと通じて下さい。」

すると、嬢さんは俄かに鹿爪らしう應對したのが氣恥かしくなつたと見えて、

「アラ」と袖で口元を壓へて、

「まア——、知らないわ」と、駈ける様に奥へ飛んで行つて、

「かアさん、わたし悉皆欺されたわ。父うさん西川さんが被居いました」

「西川さん？ オウ之は珍らしい」と奥の方での一問一答手に取る如く聽えて来る。

「やア、これは、これは、どうぞ」と主人公自ら玄關に出馬して手を執らむ許りにする、その後で嬢さん「どなたかと思ふて私し眞面目に挨拶したの、すると西川さんと云ふ方がだつて。ヒドイわ」と云ひながら、悉皆一本參つたので氣極りが悪いやら恥かしいやらでキツキツ云つて御座る。

「それぢや」と云ひながら座敷へ通る。

「弟さんは？」

「故郷へ歸りました」

「故郷と云ふと？」

「金澤です」

「ハ、ア百萬石ですか、前田侯ですナ」

「ハ、ア」

所へ奥様が「まアよくこそ」、お老婆さんが「まアよくこそ」最後に下女までが「まアよくこそ」、その度に己れの首と手は働いた。一同の揃ふた所で己れは次の様な話をした。

④三越で偶然素敵な美人に

僕は先日三越へ行つた。洋品部で二つ三つ品物を揃へ、サテ之にしよるか、あれにしようかと物色していると、フィに後から黙つて肩を叩く者がある、見ると草田工學士だ、草田君許りでなく其の後には美人で評判な淑子夫人が控へてゐる。

「やアお揃ひで相變らず夫婦仲がいゝなア」と仰天して見せると、大將スツカリ頭を搔いて「斯う大勢の前で君の其の大聲で冷評かされと思はず顔が赤くなつて了ふよ、參つた」

「やア奥様か、そんなに離れてゐないでもう少し旦那さまの傍に附着てゐたまへ。いつ見ても鶏群の一鶴と云ふ美しさだナ」

「もう西川さん御免よ、お口の悪い。久子さん何うして？」

「妹か、今度妊娠で歸つて來た」

「まア早や大きいの？ 早いわねえ」

「今の若いものは早い、確か貴女も早かつた様に記憶してゐる」

「そんな詰らんことなんか記憶して載かなくてもいいわ」と云つて、

「西川さんお一人？」と四邊を見廻はす。

「ウン今日は一人」

「ぢや君、僕等と一寸行動を共にして呉れないか、實は妻の着物だの僕のだの少し買ひたいんだから柄を見てくれ給へ」

「さうよ、西川さんはお上手で評判だから」と妻君め巧みに煽て上げる。さう云はれると己れだつて悪い氣がしないので「ぢや」と云つて三人一緒に歩き出した。二階へ上がつて「この柄がいい、之もいゝ」と、何等の逡巡も與へず買ふものは買はしめ、「矢つ張り西川さんは」

と又もや讚美の聲を上げようとするのを「オイ茶でも飲まう」と素早く打消して、ドヤ／＼と休憩室へ入つた。

すると窓に面した一隅に年齢の頃十八か九才頃だらう、脊のスラリとした眼の美はしい色の白い鼻の高い一見目立つて綺麗な令嬢が、その母親らしいのと、弟妹と、それに下女の多勢で坐つてゐた。三人の眼は期せずして此の令嬢に灑がれた。

「ちよつと西川君」と草田君は顔を引寄せて、

「美人ぢやないか」

「ウム」と頷ぐくと、今度は妻君がチーツと見据えてゐた眼を此方へ向けて、矢つ張り小聲で「美しい方ねえ」と云ふ。

草田君は幾度か小首傾げては沈思黙考の體であつたが、聽て「當つて

見ようか知ら」と獨言を云ふ。何を呟やいてるんだらうと氣にも留めずにあると、草田君は斯う云ひ出した。

「實は己れは己れの弟の嫁を探してゐるんだ、成る可くいゝのを見附けたいと思ふてゐたんだが、どうも無い。所が其のお嬢さんなら理想的なんだ、單刀直入當つて見たいと思ふんだが、然しなんだか」と、頭掻く。

「そんな厚顔しいこと、お止しなきいな」と妻君は横から口を出した。

「ぢやお前が弟のを選び出す責任を持つか」と草田君は肉迫した。

「それは、でも」

「ぢや何も口出ししてはならん」と、嘴を尖がらしながら、今度は笑顔になつて僕に、

「どうだらう？」と、きた。根が此麼奇想天外的なことに多大な興味を持つ己れは「こいつは面白い」と思ふたので、

「ものは當つて碎けるだ、構はぬ當つて見い、なアに構ふもんかと、自分のこと無いんだから、壯快がつて薦めた。

「ぢや當つて見る」と彼は急に斷乎たる決心を示したが、急に又グナリとなつて、

「なんだか氣極が悪い」と首を抱えた。

「平氣ぢやないか」と己れは懸命に煽つた。妻君は顔を曇めた限りである。

「よし分つた、然しどうもあの娘が傍にゐる所でお母アさんに話合つて行くのは調子が悪い、少し形勢を觀望してゐて、機會を見てゐよう」





と云ふ。如何にも御尤だ。給仕女が運んで来たお茶に咽喉を濡してユタリと構へて様子を見てゐる。

すると其の裡、そのお母さんたる人はフィと立つた、そして、「ぢや私が一寸見て来るから、嬢は此處にゐて子供を遊ばせてゐて下さい」

斯う娘に云つてスタと一人出て行つた、己れは「それッ」と許り草田君をツ、いた。すると草田君は半ば無意識に立上がつて、後から追つ駆けるやうに出て行つた。己れは此の時萬斛の興味を一時に感じて、彼は執麼風にあのお母アさんに切り出すかを見たさに續いて又草田君の後を追ふた。

見るとお母アさんは何故か非常に急いで行く、草田君の足もそれに應

じて早い。そのうちお母アさんは階子段をズン／＼下りた。下りて了つてから何處かを物色する様にキツとなつて四方を見渡してゐたが、聽て氣が附いたと見えて、ドン／＼南の隅へ歩いて行つた、そして其處にゐる番頭の顔を見るが早いか、二言三言笑ひ顔で云つたかと思ふと、傍にあつた腰掛けをグイと引寄せてどつかと腰を下ろした。草田君は今も云ひ出さう、今も云ひ出さうと幾度か近付いたらしいが、今母親が斯う坐り込んで了つたのを見て、暫しボカンとして柱に寄り懸りながら様子を見守つてゐた。その裡相手は立つた、そして軽い御辭儀を番頭に與へ「どうぞ宜しく」とカラ／＼云ひながら再び今度は同じい道を戻つた。「さア今だ」と決心したのか草田君はグン／＼近寄つて行つたが、幾度か口を切り出さうとしては尻込みしてゐるらしい様子

がアリ／＼と己れには讀めた。

恰度階子段を登りつめたと思ふ瞬間であつた、草田君は到頭口を切つた。

「奥様」

すると、呼ばれた奥様は、オヤ自分が呼ばれたのかと振り返り、それが自分であつたので不審相に相手の顔を見上げた。草田君は如何にも恐縮、何とも申譯がないと云ふ表情を幾度か相手に示しながら、

「實は奥様、突然見織らぬ私がお呼び留め申して何んとも申上げ様も御座いませんですが」と云ひながら氣極り悪さに手に持つてゐた帽子をいぢくつて、

「私の弟、昨年大學に在學中の者で御座いますが、目下相當な配偶

者を求めてゐるんですが」

「ハア」と奥様の最初のキツとした何者ぞツと云ふ顔付は比の時やつと讀めたと云ふ風に柔らいだ。

「最前お見受け申しましたお連れのお嬢様は奥様のお嬢様で御座いませうか」

「ハア」

「最早御縁組の所でも御定りになつて被居るんでせうか」

「いえ、まだ、まだ學校中なものですから」

すると草田君の顔は急に希望に輝いて、

「若しお差支へなかつたら一つ御相談申上げに參上致したいと思ひますが、如何でせうか突然此處所で此處話を出すのは實になんとも」と

草田君頭へ手を上げて恐縮しながら、相手の顔色を讀んだ。

「ハア何も御縁ものですから」

「では」と草田君勇み込んで、ポケットを探りながら名刺を掴み出し、その裡の皺の寄らない一枚を、恭しく差出しながら、

「私は斯う云ふ者ですが、お差支へなかつたらお住所をお聽かせ頂ければ」と天晴れ工學士草田春光すつかり叩頭万遍だ。

「ハア、住所は牛込區矢來町●●番地。吉岡と申します」

と、奥様の方も相手が立派な紳士であるのを見その風體で知つて、何んの躊躇もなく答へた。草田君は天にも昇る心地して、

「それでは二三日の裡に御主人にお目に……」

「良人は只今生憎避暑に行つてるので」

草田君、この返事には少からずオヤ／＼の體であつたらしい、何故ならば此の時價の高い昨今餘裕綽々として避暑に行く様な身分なら、大分僕等と違つて身分が上等らしい、それぢや迎も話にならないと云ふ失望の色が微かに眉宇の間を掠めたが、直ぐ又「なアに其處が何も縁だ」と一縷の望みを抱いて、

「左様で御座いますか、ぢや何れ改めて悠つくり他人を介してお話に上りしますから、どうぞ其の節は」

すると奥様はにこやかに笑んで、

「何も御縁ですから」

「然し如何でせう、大體の方針、云はゞ違つてもいゝと云ふ様なお返事を只今伺ひ出来ませんでせうか」

と、思ひ切り大分肉薄した。それには奥様も、

「まアなんて氣の早い人だらう」と少からず呆氣に取られたらしかつたが、然し其態度は曖にも見せず、

「只今申上げた通り、私一人の意見では、兎に角良人ともよく相談致しまして」そりや尤もの云ひ分だ。草田め嬉し紛れに少し逆上てゐるナ、考へて見る誰れが途中で見ず知らずの人にビタリと逢つた、娘を見た、欲しいナと思ふたから呉れるか何うかも無いもんだ。己れは後に其れを聴いてゐて思はずブスリと噴き出した。草田君は其の笑ひ聲に驚いて振返つた、すると其處に己れと云ふ大の男が何時の間にか控へてゐたものだから、妙にテレて、

「ぢや何れ近々」と云つて、今度は急にグイと首を深く垂れて深厚な

る敬禮の下に、

「洵に突然此慶話を申上げて申譯も御座いませんでした、幾重にもお詫び申します」と、神妙に口を利いた。

「いゝえ、どう致しまして」と先方も又町重な挨拶の下に之に報いた。二人は右と左に別れた。

すると何時の間に来てゐたのかホンの近くに其の問題の令嬢がヂツと最前からの二人の會話に耳を傾けてゐたらしかつたのが眼に付いた。草田はそれを見てハツとしたらしい。己れもヤツと始めて氣が付いた、己れは先刻から二人の顔を見較べては夢中になつて其の話を聞き洩らすまいと許り心掛けてゐたものだから、小つとも何時の間に其處へ來たのか氣が付かなかつた。察するに屹度あまり母の戻りが遅いので氣

が氣でなく休憩室から飛び出て探しに來たらしい。すると思ひきや其處に母が若い紳士と話込んでゐたので、何事だらうと其れとなく近くに佇んでゐたらしい。然もその話が自分に關することだつたから尠からず面喰つたことだらうと思はれる。草田君も眞赤になつた、令嬢も眞赤になつた、獨り我れ關せずと最初から終りまでニヤ／＼面白相にしてゐたのは己れ許りだ。

### ◎愈々直接談判

別れて了ふと同時に急に昂奮を覺えたのか草田君は僕に碌々物も云はずに休憩室へ戻つて來て、何故か息をセイ／＼云はしてゐる。

「貴方到底頭仰言つたの？」

「ウム、云つた、到頭云つた!!」と高らかにスバリとした調子で昂然として答へた、其處へ己れが坐つた。

「やア云ふたナ」

「あ」と、元氣が馬鹿にいゝ、それは云はむと欲して幾度か躊躇してゐたものを一遍に吐き出した昂奮より外はなかつた。

彼はグイと其處にあつた冷めたい飲みさしの茶を飲み乾して、

「到頭云つた!! 到頭云つた」と、再三繰り返した後で、

「旨く行くか、それとも駄目に終るか、ハツハ……」と肝高く笑つて、

「さア歸らう、遅くなつた」と、急に妻を唆かして立上つた。

「己れは失敬する、電車が遠ふから」

「さうか、ぢや失敬」

「オヤさう、ぢや又、左様なら」

斯くして彼等と別れた己れは再び先刻買はふと思ふて買ひ得なかつた洋品部へ立ち戻つた、そして應て自家へ歸つた。

翌日であつた、草田君は夕刻フイと己れを訪ねて來た。

「時に君に少し願ひ度いことがあるんだが」と云ふ。

「何を？」と首を上げると、

「外でも無いが、昨日の彼の件に就いて是非君が媒約に立つて欲しいんだ」と意外な云分だ。

「己れが媒約人？」と思はず失笑して、

「困るなア」と頭搔くと、

「いや此の際君を置いて他にない、君は今般の事情を一番明白に知つ

てるから」と云ふ。そして、

「考へて見たまへ、誰れが僕が斯うくした具合でお母アさんに逢つて、斯うく云つて話を知たんだからと云つて、媒約人になるを承知して呉れるものがあるもんか、屹度ウヘー君は思ひ切つた事をやる男だなアーと大抵の奴は仰天して了ふ。それよりか僕として他の者に實は斯うくの譯でと云ひ出せるものか。聊か己れの估券に關する譯だ。で色々己れも其の人選に惱んだが、こりや一番君を立てせるに如くは無いと思ひ込んで今日は遣つて來たんだ、是非共承知して貰はなくちや」と退引ならぬ頼みだ。

「君はそれに媒約役に就いては充分の經驗を持つてゐるんぢやないか、オイ頼んだぞ」

と、前へも後へも退かさな。己れは暫しが程はウーン／＼唸つた。

「そんなに唸らなくてもいゝ、返事してくれ」もう破れ被れだ。

「よし、談判して遣らう」

草田は思はず額を叩いて、

「チエツ有難い。ところで何時行つて來れる？」

と、短兵急も急、突撃の狀態だ。

「さア此處二三日は非常に忙しいから、其の裡に屹度行く」

「屹度か、呉れくも頼んだぞ」

斯う云つて喜んで草田は歸つて行つた。それから早くも二三日経過した。多忙も過ぎた。一體己れと云ふ男は何かで書いた筈だが、非常に精神が興奮した。曉には驚く可き許り流暢な辯が出る、反對に少し閉

さいだが最後その一言一句の重いつたらない、吃々として我れながら愛憎が盡きて憎らしくなる。それで何時興奮が突破し、何時又沈鬱になるかそれが自分ながら分らない、實に微妙な心理作用は兎ても其の瞬間でなくちや發見出來ないのだ。

そこで今己れが草田君の乞ひを納れて先方へ行つたとする、不幸にして折悪しく沈鬱の場合であつたら、十云ふ可きことが二つ位しか云へぬことになる。一體こんな縁談のことは滔々懸河の辯を振はなくちや初對面の相手を感動させることの出來難いものだ。

己れはヂーッと何かの興奮状態を待ち構へてゐた。興奮したが最後そらッと一目散に飛び出さうと思つてゐるんだ。

所が偶然弟が僕の妹の良人たる和氣君を連れて來た。ビールを一

本二本傾けてゐる裡にツイ此の話が出た。何故又この話が出たかと云ふと、和氣と云ふ人は非常に理路整然たる話をする、それに如何にも雄辯で、云ふことが又一々至誠から出るから、聽いてゐるものは感動せずにはをられないんだ。現に隣の鈴木君もツク／＼感心して「世の中に此慶痛快な話の旨い面白い人はゐない」と激賞してゐる位だから誰れの眼から見ても同じだ、それは又一面如何に頭腦が良いかと云ふことを裏書してゐる。

で僕は何日まで斯うヂーツとして精神の興奮を待つてゐて、草田君の約に反するよりも寧ろ一切を和氣君に打ち明けて、和氣君に行つて貰つた方が、生じつか己れの咄辯で頼み込むよりも孰慶に有利かも知れぬと思ふたので、一切を披歴した後で、



「どうです、和氣さん貴方が此の話を引受けて下さいますか」と頼んで見た。チーツと話の経過に耳を傾けてゐた和氣君は此の時顔を上げて、

「面白いですなア、寧ろ痛快ですなア、宜しい行きませう」と、二もなく引受けて呉れたので、己れはホッと重荷を下ろした。

恰度其の時己れの弟は座敷にゴロリとしてゐるのが堪えられなくなつたと見えて、僕の友人の子息義人君（中學一年生）が矢つ張り傍にゴロリとなつてゐたのを顧みて、

「オイどこかへ散歩に行かうか」と催ふて見た。

「散歩？」と義人君は勇み立つて、

「賛成！ 僕大好きだ、行きませう」と早や立上がつた。

「どこへ行かう、戸山ヶ原へ行こか」

「どこでもいゝ」と話合つてゐるのをフと耳にした僕は、

「オイ、オイ」と二人を呼んで、

「どうせ散歩に出る位だつたら、何處へ行つたつて差支へないだらうそれぢや二人で今話してゐた話の本尊草田君の頼んだ其の娘さんの家をどの邊か見て来て呉れないか、豫め家の見當を附けて置かないと和氣さんが行く時に迷つたら困るから」

「どこだい？」

「牛込矢來町だ」

「牛込？ それぢや近いなア」と弟は返事しながら、義人君を顧みて、

「君行かうか」

「僕は何うでもいい、行きませうか」

「ぢや行かう、草田君は何麼家の娘に見當を附けたのか、大に興味津津だ」とニンがりして立上つた。附記するが草田工學士が弟の爲めにと云つた其の弟と僕の弟とは大學の同窓で而かも同郷で、猶ほ又中學時代からの仲い、友達ときてゐるんだから、己れの弟は全で我が事の様やうに好奇心かうきしんを持つた、二人は田舎者が軍艦せんかんでも見物けんぶつに行く様な一種しゆの物珍ものめづらしささで出て行つた。

略二時間程りやくにじかんほどして二人は歸つて來た。

「見て來たぞ」と額ひたへに汗あせをにぢませてゐる。

「直ぐ分つたかい」と己おれはニコ／＼尋ねた。

「ウン直ぐ分つた」と云ひつゝ、

「割合わりあひに大きな家いえだつた、ねえ義人君よしんどくん」

「ウン大きいよ、直ぐ分つたねえ」と義人君よしんどくんは合槌あひづちを打つた。

「電車でんしゃは？」

「柳町やなぎぢやうで下りた」

「ホウ柳町やなぎぢやう？ 近いなア。それぢア後あとで地圖ちずを書いておいてくれ」

と云ひつゝ、

「誰たれか出てゐたか？」

「誰たれも」

「吉岡よしどかなんといふ家いえだつた？」

「さア何なにんと云つたか、それまで注意ちゆういしなかつたが。義人君よしんどくん、君きみ見た

「かい？」

「僕見たよ」

「僕もチラと読んで見たが、我が事の様は少し氣極りが悪かつたが、確かエーと」

「あの字はエーと」と義人君も小首傾けたが、遂に二人とも孰方も思ひ出せなかつたらしい、何時しかあゝ疲れた〜と云ひながら二人は羊羹をムシヤムシヤ喰べた。話は其の儘になつた。和氣君はそれぢや此處話は眞晝中に行くよりも夕刻尋ねて行つた方が一番話に落着があつていゝから、それぢや明日四時頃私は改めて此の家へ来て、それから改めて先方へ參ることにしませうと定めて、其の話はそれ丈けにして、直ぐ一同は和氣君歡迎の爲めに「すゞめ」へ出掛けた。

翌日己れは退引ならぬ所用の爲めに出掛けて行き、歸つて來ると、和氣君は既にチャンと遣つて來て、座敷で妻と話込んでゐた。

「失敬しました、失敬しました、ツイ遅くなつて」と己れは濟まなかつたと詫びを云ひながら、座敷へ上がった。

「いゝや、もツイ先きに來た許り」と和氣君は敢て氣に留めてゐない。林檎の皮をむきながら、暫らく浮世話をした後で和氣君は、

「ぢや行つて來ます、番地が分つてますか」

「あッ、その住所は。困つた實は弟に詳しく聽く筈になつてゐた所が、ツイ弟が地圖を書いて行くことを忘れらしい。然し義人君は覺えてゐるだらう、オーイ義人君」

「オーッ」と書齋で本を讀んでゐた義人君は出て來た。

「君知つてるかい、昨日行つた道順を」

「さア」と考へ込む様子をして、

「確つかり覚えなけれど大體」と云ひながら、又書齋へ駈けて行つて、鉛筆と紙とを持って来て、それを己れの前で擴げながら、

「東京の地圖は確つかり分りませんが」と云ひつゝ、此處で電車を下りて、斯う行つて、斯う曲がつて、左に折れて、エーと此の邊です、此處に交番がありました、此の交番で聴きましたと割合に詳しいが、

「これはアヤフヤですよ」と云はれて聊かがツかり。

「僕に覺えて来いといふんでしたら詳しく覺えて来る筈でしたけど、弟さんさへ知つてゐりやいゝんだと、僕平氣でしたよ」と、嘯きながら「然し確かに斯うでした」と云ふ。頭腦のいゝ子の云ふことだか

ら、それぢや大した間違ひもあるまいと略見當を附けたが、考へて見れば己れが行く可き筈の所だ、それを和氣君に行つて貰ふんだから、その和氣君にアヤフヤな道順を教へては洵に相濟まぬ話だと思ふたので、それぢや一層その宅の前まで己れも幾分の責任があるんだから、和氣君のみを煩はすことなしに、おれも共々に其の家を探し、見附かつた上で自分のみが歸つて了はふと思ふた。でなくちや遙々折角遠い所から東京へ久し振りで來ながら、此處縁談を頼まれたがいゝが、その爲め家が見附からぬ爲め途方に暮れるのも、己れとしては餘りの厚顔で申譯のないことだと思ふたからだ。

「僕も門の前まで一緒に参りませう、道々草田君の家庭のことも詳しくお話し申上げたいですから」

「さうですか、それぢや僕も大變助かりました」

「貴方、御飯の用意が出来ました」と其の時妻が注進に来る。

「それぢや」と二人は立上がつた、旨い肉がたぎつてゐた。

◎ハツと答へて出た主こそは

食事が済んで、

「さア出掛けませうか」

「え、出掛けませう」と互に洋服を着込んでゐると、妻は横合から、

「好奇揃ひですわねえ」と子供を抱いて笑つてゐる。

「和氣さん確つかり遣んなさいよ」

「確つかりて、至で木によりて魚を求める様な話で、ハツハ……」と

答へて和氣さんは先きに出た己れを追ふた。

途中、己れは「つまり草田君の弟と云ふのは」と大に説明の勞を執つた。和氣君は一々頭腦の中に其れを刻み込んで行つた。

「一體先方の名前は何と云ふんです？」

「吉岡と云ふんです」

「吉岡何んと云ふんです？」

「さア其れを昨日見に行つた弟にも聞いたんですが、確つかり覺えてゐない相でした、草田君にも單に吉岡とのみ名乗つた筈ですから」

「住所は？」

「その牛込矢來町なんです」

「牛込矢來町!!」

と、小首を傾けて、

「牛込矢來町の吉岡と云んですね」

「え、」

「かうつと何んだか聞いたことがありますよ、エーと」  
暫し幾度か記憶を呼び出しかけて、

「さう、さう」と獨りで頷ぎながら、

「定春と云ふんぢやないでせうか」

「さア」

「定春と云ふ方でしたら僕知つてますよ、知つてる所ぢやない僕の血縁ですよ」

「へえー」

「若しや定春と云ふ人だつたら、奇遇ですなア、實に奇遇ですなア、その定春と云ふ人の弟さん今京都府にゐるA君と僕とは無二の親友なんです」

「ホー」

「定春と云ふ人は確か陸軍少將ですよ、そして其の奥様の兄さんと云ふのが今の▲▲縣知事ですよ」

「ホー」

「僕は五六年前に一度偶然その兄さんや奥様に須田町で逢つたんですよ、その時お住所は何處ですかとお尋ねしたら、確か確か矢來町と聞いてました。」

「へーえ」

「僕はまだ高等學校時代によく遊びに行つたもんですよ、だからよろしく知り合つてゐるんです」

「フーム」

「どうも僕は何んだか其の吉岡と云ふ人が定春さんの様に思はれて仕方がない」

「ぢや今十七八の娘さんが其の時代にゐましたか」

「其の頃まだ小さかつたでせうが、確かゐた様に覚えてますよ、イヤ確かにゐました」

「それぢやヒョツとすると其の人かも知れませんかア」

「さうかも知れませんが、若しさうだつたら、實に世の中は廣くて狭いと云ふことを痛切に感じますなア」

「全くですぬえ」と調子を合はすと、

「何んだか其の様に思はれて仕方がない、胸がドキンとして來ました」

「でも人違ひでせう？」

「さアそれが若し」

など、話合つてる裡に電車道へ來た、二人は乗つた。

電車から下りて義人君に教へられた通り真直にだんだら坂を登り詰めると、成程交番があつた。此の交番の横を左に折れるんだと聽いてはゐたが、若しや違つてゐたらと念の爲めにと再び訊いて見る、矢つ張り義人君の言葉に過ちなく左に折れて八百屋の横町を曲がつて一番目の小路を曲つて二間目が其の番地だと云ふことが分つた。教へられた通りに行く。

「この邊でせうか」

「さうでせう」

「貴方、マッチ持つてますか」

己れはポケットを探つた。

「ありません！」

「さう？」と云ひながら和氣君は一生懸命あちこちのポケットを探つてゐたが其の裡、

「あつた！ あつた！」と云ひながら、マッチを取り出して試みに一軒の家の表札近くすり寄つてマッチを擦つて見る。姓が違つてゐる。

「此家ぢやない」と云ひつゝ又歩いた。

「この家かも知れない」

「さア」とマッチを出す。一方を照して見ると町名と番地ばかりだ。姓はこつちの方だナと右の方へ足を引きずりながら、マッチを擦る、ふらと消える、又擦る、又消える、斯くすること二三度、何うしても點かない。

「どうも此家らしい」と和氣君は異様の顔付しながら、箱からマッチの棒を取り出した。

「今度はゆつくり落着いて消さない様に」

「ム、ム」と頷いて念入りに點したが、今しそれを上に翳さうとする時、ふらと又々消へた。

「此の棒は變だ」

「どれ私に貸して見せなさい」と云つて己れは手を出すと、



「待つて下さい、モ一編やつて見ますから」と云ひつゝ、和氣君は今度こそはと念には念を入れて擦り、片手で風を蔽ひながら、チーツと模様を見詰めてゐたが、もう大丈夫と確信がついた、

「これなら」と云ひながら、大事相にして上に翳した。二人の眼は大きく開かれた。

見ると古びた表札は正しく吉岡と讀められた、オツ此家だと思ふ間もあらず和氣君は既に其の名をも讀んだものと見えて、

「やッ」と小声ながらも頓狂な叫びを上げて、

「定春だッ、そらッ」

見ると成程定春だ。マツチは同時にふッと消えた。

「あッ矢つ張り定春だつた！」と和氣君は太息するかの様な呼吸をし

て、

「何んだか己れは胸騒ぎすると思ふてゐた」と感に堪えぬ面付して、

「あゝ實に、實に不可思議だ、奇遇も奇遇、凡そ斯うも不思議なことがあるものか知ら」と寧ろ呆氣に取られて暫らく呆然とする。

「どうです入る勇氣がありますか」

「勇氣どころぢやありません、大に懷舊の情に堪えません、こりや實に面白」

「ぢや僕は之で用が無いんですから歸ります、途中草田君の家が近くですから一寸立寄つて此の話をして行きますから」

「さうですか、では入つて行きますよ」と和氣君は思ひ切つてキツと門をあけてツカ／＼と奥へ入つて行つた。己れは好奇心に唆られてチ

ツと息を凝らして門前で形勢を觀望してゐた。

「御免なさい」と闇をついて和氣君の聲は大きい。

「ハイ」と、さわやかな年若い女の聲がしたかと思ふと、

「私はお國で御懇意にしてゐました和氣で御座います、御主人は被居いますか」

「主人は少し遠方へ參つてますものですから」とハッキリした返事が聞える。

「それぢや奥様は？」

「ハイ、ゐますで御座います」

暫く森とする。

「さア何卒お入り下さる」

「それぢや一寸御邪魔さして頂きます」と云つて靴を脱いで奥へ案内された様な氣配がする。

「よくこそ被居いました」と、どうもあの娘らしい聲がする。「私は和氣と云ふものですが」と和氣君も改めて挨拶してゐるらしい、四邊が針の音でも聞える位の静けさだから明白に聞えて来る。して見ると先刻の玄關へ出た女の聲と同様だから玄關へ出たのは矢つ張り娘さんだつたのかな。

「之は之はまアお珍らしい」と今度は奥様の聲がする。

「和氣で御座います、永々御無沙汰いたしました」と和氣君は叮嚀を極めてゐる。

「まア悉皆御立派にお成り遊ばして、見違へる様で御座います」

「やア」と和氣君は云つてゐる、外から見えないけれど屹度頭を掻いて恐縮の體だらうと察せらる。

奇縁！ 奇遇！！

此の様子ぢや色々懐舊の話も湧いて随分長びくだらうと思つたし、時々一人二人通りすぎる連中が軒下に突つばつてゐる此の己れを不思議相に見詰めたりするので、何んだか薄氣味が悪くなつたりしたので、己れは躊躇として踵を廻らした。そして草田君の宅を訪ねた。草田君はツイ先達まで本郷に住んでゐた、本郷にゐた頃はよく己れは訪ねて行つたが、牛込へ移轉してからは一度も訪れなかつたんだから家を探すに相應の勞れを催した、でも直ぐ分つた。

あゝ驚く可きの進化ぢやないか、草田君は實に宏壯な邸宅を構へてゐる、全て本郷の時と較べると雲泥の差である、家を隣家よりも一間餘り土臺を高くして両手で抱へ切れぬ様な石の門だ、然かも押して見ると、戸は重々しくもギイと云ふ、人間ギイと云ふ音の發する門の家に住まなくちや駄目だ、草田君近頃何かいゝことがあつたと見えるぞ。がらりと開けて、

「オイ草田君、居るか。やアゐる、ゐる、奥様失敬」

二人は折柄茶の間に睦まじく語合つてゐた。

「やア西川君か、この間から君を待つてゐたぞ、今日も来るか明日も来るかと今も噂してゐた所だ」

「さうかい」と云ひつゝ靴を脱ぎ、脱ぎ、

「君や立派な家に住んでるなア、近頃出世でもしたか」  
 「ヤア、早々冷評か」と来たナ、どうして〜」  
 「でも石の門ぢやないか」と云ひつゝ入つて行き、  
 「ヤア奥様失敬、いつ見ても綺麗だなア、日向さひ子も足の下だ」  
 「いやよ西川さんは何時も冷評かすんですもの」  
 「冷評かすんぢやない、あゝ家は宏壯天を注し女房はその美天下を風靡し、斯くて草田君萬歳か」  
 「オイ、オイ」とそれでも草田君悪い氣はせぬと見えて嬉し相にニコ〜しながら、  
 「二階へ上がれ」と云ひつゝ先きに立つ。  
 「暗いなア」



「今寝ようと思ふてゐた所だ、今電燈をつける、オツと注意して上がらんと危ないぞ」と、云ひつゝ、駆け上がつて行つたかと思ふとバチン急に惶々とあかるくなつた。

「此處が書齋か」

「ウン」

「己れの書齋よりか立派だ、生意氣だぞ。此處が座敷か」

「ウン」

「フーム」と見廻しながら、

「その疊のへりはお寺の疊みたいだ、氣に喰はんぞ、君は何時でも此の部屋へ入ると今でも息を引取る様な氣がせぬかい？」

「ひどいことを云ふねえ」と一寸顔を顰めて、

「己れも此の疊は氣に入らないんだ、もう云ふて呉れるな。君のは眞正而からビシ／＼やつ付けるんだから堪まつたものぢやない。その代りどうだ景色はいゝだらう」と窓を開いて見せる。

「ウンこりや素敵だ、一望東京が見える見えるお江戸が見える、やア品川が見える横濱が見える」

「其處に見えやしない」

「これは形容詞だ、形容詞と云ふものは必要なものだぞ、オイ咽喉が乾いた、お茶が飲みたい、女房を呼んでくれ」

「オーイ女房ッ」と草田君は聲を張上げた。

「ハイ只今」と云ひつゝ、妻君は茶を運んで来て、「女房だなんて随分よと態と白い眼をして見せる。」

「奥方様、怒つたね」

「いやよ奥方様だなんて」と今度は艶然。言葉一つで草田工學士夫人

淑子の君は喜怒哀樂の變化が凄まじく早い。

全く草田君の妻君は音に聞えた美人で、道を歩けば人々アレヨ〜と立止まる要素を備へてゐる位だ、況んや輝く電燈の下に其の艶麗さでない。

「オイ草田君」

「ウ？」

「君の妻君程美しい女は無いぞ、あの髪、あの顔、あの鼻、脊、身體、足、手、綺麗なものだ」

「もう西川さん許して頂戴、もう協はないわ、お菓子をどつさり持つ

て來ますから何も云はずに置いて頂戴」と云へど流石に會心の微笑は見逃がさじ。

「己れの妻は云つてゐた、私の家へ今まで遊びに來た人の中で草田さんの奥様は全て繪から抜け出した様な美人だて」

「オイ西川君、良人の前で餘り賞めて呉れるな、偶には己れも賞めてくれ」

「君もい、品行はよし氣立は優しいし、石の門はあり」

「オーイ勘忍してくれ!!」

二人は座敷の机を圍んで向い合つた。

「扱て草田君實は」と己れの行かなかつた理由、及び和氣君が最も適任であること、その和氣君と偶然血縁關係のあつたこと、及び和氣君

が目下只今話の最中、己れはそれを見送つた其の歸りであること一切を物語つた、すると、

「へーえ、實に世の中は廣くて狭いねえー」と、草田君は廣くて狭い額を叩いて云つた。

「だから此の交渉如何の返事は二三日の裡に齎すことにする」等述べて、あとは暫らく妻君と三人で浮世話、何日か淑女畫報で知つたんだが、妻君は目下上流婦人として心得置くものゝ一つと覺えてか栗原玉葉門人一同と寫眞を寫して載せてゐたことから、その寫眞は此處の奥様がお汁粉を喰べかけてゐたことまでさらけ出したので妻君悉皆ベソを掻いて「愈々以つて西川さんには協はない！」と冠を脱ぐ。暇を告げて自宅へ戻る、がらりと開けて入つて行くや否や、妻が飛ん

で出て、

「貴君遅いぢやありませんか、和氣さんが先刻からお待ちですよ」と云ふ。

「オーツもう歸つて來て居るのか」と云ひつゝ、靴を投げ出すと、

「遅かつたですねえ」と和氣君の聲がする。

「やア済みません、實は草田君の所でツイ〜話が延びたものですか」と云ひつゝ、座敷へ通つて、

「どうでした？」

「意外でしたなア」と先刻の記憶を呼び起しながら、

「あれからズつと話込んでゐたんですよ」

「何うした結果は？」

和氣君は天機は仲々洩らさじと許り悠然と構へて、

「先づ私の家と吉岡さんとは斯う云ふ関係があるんです、今も奥様に説明してゐた最中なんですが」と云ひつゝ、其處に書き認めてあつた原稿用紙を引き寄せながら、

「私の祖父から出て斯う云ふ具合に」と一々説明しながら、「此家から斯うして斯うなつたのが吉岡家です、だから此の線で御覽下さい、私と斯う云ふ関係になるんです、複雑ですが云はゞ遠い〜親類関係を生ずる譯ですな」

「ウム、ウム」と、己れは明細に至らざるなき其の説明に一々首肯した後、

「何うでした？」と又訊いた。和氣君は愈々玉手箱を開いた。

「先方では草田君のことを世の中には彼麼快活な方があるものでせうか、軍人以上だと驚いてました。そこで私は平生の草田君を貴方に聞いた通り話しました處、成程其麼面白い方なんですかとニコ〜聞いてましたよ。

さて兄弟のことから悉皆話した後で、

「要するに結婚と云ふものは機會です、男の方はまだ大學にゐる學生ですけど學生中でも機會さへ宣かつたらと思ひ、話丈け定めて置いて卒業した曉改めて添はすことにしたい方針であります」と述べ、私は之は聞いたんですがと前置して其の學生の純な事、模範的人物なこと、磊落の上なきこと等を率直に並べた。すると奥様は傾聴久しうした後で、



「大變結構なお話です、實は先達も或るいゝ所から申込みもあつたんですが、私の教育方針と致しまして、娘は學校にゐる間だけは何も知らぬ飽く迄も無邪氣な所謂眞の娘として育て、見たいと思ひます、それ故結婚の話などと云ふ其塵世間に近づいた話は噁にも聞かせたく無いと思ひまして實はお断はり申上げた様な次第で御座います。で只今のお話も至極賛成で御座いますが、どうか娘の卒業するまで此の話は中絶して戴きたら御座います、卒業しましたならもう其れからが一人前の女性としての教育もありますから、其の際にして頂きたいのです、今は何も聽かせ度くない希望で御座います、それこそ純に育てたいのです、私は結婚した時はあまり年若く何も知らずに嫁ぎましたので世の中と云ふものは娘時代に少つとも存じませんでした、それは不幸だ

と思ひました、乃でせめて娘もつた時には娘だけは相當の年配にしてから嫁入りさせたいと心掛けてゐました。決してお断はり申上げる爲めに此塵事申すのではありません、眞實で斯う申すんで御座いますから、どうか此の上は卒業まで此の話は待つて戴きたら御座います、何も御縁のものですから。斯う云ふ先方の返事でした」

己れはチーッと一句も遁がすまいと耳を立てゝゐた。

「成程確つかりした云ひ分ですな」

「そりやお母アさんと云ふ人は確つかりした方ですな」

「左様でせう、その云分は仲々凡人の云へないことです。……ぢや結局がそれですね」

「ま、左様です」

「娘を見ましたか」

「どうも最初出て来たのは目的の其の娘で無いらしかったですよ、私は奥様の兄さんの令嬢ぢやないかと思ふんですが」

「知事のですか」

「左様です」

「ぢや遊びに来てゐるんでせうか、それとも東京で教育する爲めに預かつてゐるんでせうか」

「さア」

「貴方は小さい時の娘さんの顔覚えてゐませんか」

「おまねえ」

「出て来たのは誰れでせう、美人でしたか」

「ゾツとする程の美人ぢやなかつたですけれど、群を抜いてゐましたよ」

「それでせう」

「でも奥様の言葉使ひが違つてゐたらしかつたですよ」

「左様でしたか。」

「斯うなりますと世間の方は皆な知合の様な氣がしますねえと先方も驚いてましたよ」と山崎君は云つてから、言葉を改めて、

「僕には斯う云ふ離る可からざる關係の家が東京に三軒あるんです。

第一は此の西川家、第二は九段、それに此の吉岡さんです。その吉岡さんと偶然とは云へ斯慶話で測らずも住所を明らかに知つたとは全く意外でしたよ」

と幾重にも驚いてゐる。

「何うしませう、此の話はそれぢや」

「斯う云つてました、娘が卒業した、曉には何れ貴方つまり僕ですな、僕の方へ葉書を差上げますから、御縁があつたら宜しくとのことでした」

「ぢや保留ですね」

「ま其麼形ですな」

「兎に角事の結果の如何に關せず面白かつたぢやないですか」

「愉快でしたな」

斯くして此の話は先づは一段落を告げた、此後どう發展するか其れは飽く迄も疑問である。さりながら事の成否は兎もあれ突飛に出て、突

飛に進んだのは如何にも面白い。

翌朝、草田君の方から遣つて来た、一切の顛末を物語つて聽かせ、改めて和氣君に紹介すると、二人は忽ち一見舊知の如くなつて、

「何分宜しく。全つきり先方を知らぬ西川君に行つて貰ふより貴君の方が怎麼に先方を緩和し、有功であつたかも知れませんでした」と云ひながら草田君は堅く和氣君の手を握つて感謝の意を表して歸つた。

#### ●申譯ありません

65  
以上の話を眞木さんの家族一同は面白相に聽いてゐたが、話が終ると、スーツと奥様が一膝乗り出して、「まアよく似た話がありますねえ」と云つて次の様な話をした。

真木さんの奥様は先日娘の花子さんを連れて松坂屋へ行つた。そして「半襟の部」にゐて、あれにしようか、之れにしようかと一枚一枚念入りに物色してゐた。すると其の様子をヂツと一方にあつて身動きもせずに見入つてゐる二人の貴婦人連れがあつた。奥様は早くもそれに気が付いて「あかしい、どうして私等許りを彼等に熱心に見て被居るんでせう」と思ひながらも氣にも留めずにゐると、聽て幾度か逡巡の後、遂に意を決した様子をして其の二人が近付いて来て、

「奥様、何んとも申上げ様もない失禮なことを承はりますが、此方のお嬢さまは未だ」

と、もじ／＼しながら其の裡の年かきな婦人が口を切つた。奥様は早くも「ハ、アン、縁談だナ」と思つたので、懇ろに挨拶を交換しなが

ら、

「ハア、之はもう天にも地にも私共に一人しかない娘で、これつ切りで御座います」

花子さんは養子娘である。

「まア、左様で御座いますか、まア」と、さも堪えやらぬ惜しい面持して暫しが程は花子さんに見惚れ、

「實は親類に是非美しいお嫁さんが欲しいと探しあぐんでゐるものですから。ツイ／＼失禮を申上げてと」二人は聊か赤らんで、幾重にもお詫びしながら去つて了つた。

「時々此の娘を見て左様仰しやる方があるんですよ」と奥様は我が子ながら全く綺麗だと見惚れる様に花子さんの顔を覗いて云つた。

「して見ると時世が最近非常に進歩して來ましたね」

「簡單でいゝかも知れませんか」

「以前は之と目指した候補者の家まで隨いて行つてその家を究め、其れから申込んで行つたものですが、變れば變る世の中ですわね」

「さうした方が隨いて行く電車賃丈け助かりますね、何でも今は物價騰貴の際ですからねえ」

一座は均しく頬を崩した。

最前から僕の語る話も、又奥様の語る話にも默念として耳を傾けてゐた此の家の主人は此の時始めて口を利いて、

「娘も左様云ふ具合に見立てられる標緻だと思ふと親として悪い氣もしないが、然し飛んでもないこともありますよ」

と、前振れして語り出した話は斯うだ。

去年の五月、眞木さんは娘の花子さんを連れて、上野の森へ出かけて暫らく花散つた後に出た許りの柔かい青葉の木蔭にうつとり眼を閉ぶつてゐた。然し娘の花子さんは父の様に何時迄もヂツと坐つた儘になつてゐるのが淋しくて仕方なかつたので、「ねえ父さん、下りませうよ、下りませうよ」と強請んだ。それぢやと漸く立上つて漸次公園を下つて廣小路まで來た。

「父さん活動を見ませうか」

眞木さんは未だ嘗て娘を一人ぼつちで外へ出したことが無いので折角の望みを断はるのも氣の毒だと思ふた。そして少し戻つて公園下の活動館へ足を入れた。聽て其處を出たのは西の空の赤い頃で、暮色は既に

に上野の森に迫つてゐた。

「何か喰べたい」と無邪氣な花子さんは父をツ、いて見た。父も空腹だつたので、「それぢや」と云つて足の向くに任せツイ近くの「米久」牛肉店へ入つた、そして二階の一隅に控つかと腰を下ろして思はず「あゝ疲れた」と吐息した。そこへ又新たに客が上つて来た、見ると若い大學生であつた。彼等はツイ隣の机に陣取つた。

食事を済ませた父娘はそれから直ぐ家へ歸つた。其の翌晩である、眞木さんは意外な手紙を受取つた、それには「私は昨日上野の森でも貴方々に逢つた、活動でも逢つた、それに最後に又米久でもお目にかゝつた。外でもないが私の連れの男が是非貴方の娘さんを欲しいと云つてゐる貴方は呉れてもいいと思ふ」と云つた様な

非常に傲慢な書きつ振りであつた、そして法科の學生であると住所から本名まで明記してあつた。

其の時恰も眞木さんの兄さんで當時當地の控訴院部長をしてゐる人が偶然にも其の手紙が着いて間もなくのこと突然遣つて来た。で「どうしようか」と眞木さんは早速相談を持ちかけた。すると猶豫を云はず其の手紙は警察へ届け出したら宜からうと云ふので、眞木さんは直ぐ様それを持參して「何分宜しく」と署長に頼んで歸つた。

翌日署長から呼出が来た、早速行つて見ると本人を呼んで篤と訓戒を與へて置いたから御安心なすつて下さい。大學生と云ふのが虚言だと思つて取調べたら矢つ張り眞實大學生であつたと云つて、

「貴方々に食事を御馳走された様に申しましたが」と付け加へた。

お前達はあの娘さんに  
手紙を出したのか  
アー



まわ

「私が食事を」と真木さんは吃驚して、「いゝえ決して其慶事はありま  
せん」と極力否認した。すると署長はチョツと舌打ちして、  
「仕方のない奴だなアー」と眉をしかめたが、直ぐ笑顔に變つて、  
「まア其慶譯で。もう決して心配は要りませんから」と、充分に保證  
して呉れたので、真木さんは厚く禮を述べて歸つた。途すがら「どう  
して私共と食事したなど、變な事を云つたんだらう」と幾度か小首を  
傾げて「アツさうか」と始めて頷いたのは米久の二階の隣へ坐り込ん  
だ二人の大學生のことが其の時思ひ當つた。昨日の手紙の様子と云ひ  
署長の前で旨く云ひ通れた口調と云ひ、それをダシに使つたらしい。  
大學生にあるまじき以ての外の云分だと其の時ムツとした。そして苟  
くも最高學府の者でありながら上野から活動へ、活動から米久へ、米

久から自宅まで知らずくの裡に後を随けるなど、學生にある間敷さ  
行爲だと思ふた。然しもう之で危険が去つたと稍安堵の思ひで家へ歸  
つて來ると、

「貴方、又手紙が參つてますよ」と、妻君がオドオドしながら云つた。

「ウン？ 又手紙？」と流石に眞木さんは憤怒の高鳴りを禁ぜなかつ  
た。そして妻君が差出す其れを取る手遅しと許り披いて讀んだ。

「なんだ訛狀か」と讀み終つた眞木さんは額の青筋を漸と收めて斯う、  
云つた。

「まあ、お訛びして來たのですか、私は先刻から胸がドキ／＼して碌  
に御飯も喰べられませんでした」と、漸つと恐怖から遁れた安堵の微  
笑を微かに双頬に浮べた。

所へ兄が歸つて來た、一切を眞木さんから聞いて、

「食事を御馳走になつたなど、以つての外の云分だ、よし己れが今か  
ら談判して來てやる」と怒髪天を突いて出て行つた。歸つたのは可成  
りに遅かつた。

「おましたか」と先刻から待つてゐた眞木さんは兄の顔を見るなり訊  
ねた。

「ウンゐた」と勝ち誇つた様に兄は答へた。

兄は何々控訴院部長法學士眞木△△の名刺を持つて面會を求めた。男  
は失神せむ許りの驚愕の下に彼を招じ上げた。

「君は苟くも將來有望な青年ではないか、然かも一度び校門を出づれ  
ば社會の崇敬を捷ち得る身でありながら、良家の婦女子に附け文する



と云ふは何と云ふ量見だ。今の大学の先生達は娘に附け文しろと君等に教へてゐるか、僕等のゐた時代には其慶學問は無かつた筈だ」と、判官一流の辛辣肉を抉ぐるが如き筆法でやり込めた。たゞさへ自分より先輩の法學士たるに辟易してゐる所へ、然かも控訴院部長と云ふ殿めしい肩書を示した上、此の筆法で出たから男は眞蒼になつてブル／＼と思はず身を震はした。そして泣いて罪を謝した。兄さんは、「善良なる法律を研究するものが、自ら法に觸れる様な研究するとは怪しからんぢやないか」

「怪しからんであります」

「して見れば君は怪しからん男だね」

「何んとも申譯けありません」

「注意したまへよ」

「ハッ」

斯くして揚々と引上げて來たんだ。

「もう何も心配することはない。まア酒でも飲まして呉れ」

斯う云つた兄の顔は晴れ／＼として一點の曇りがなかつた。一同は始めて甦へつた様な氣持ちになつた。

眞木さんは語り終つて、「世は様々ぢや、様々の人間が住んでゐる、ハッハ……」と高らかに笑つた。

## 藤田君の結婚

先日の晩、原尾君をフイと訪ねて見る氣になつたので「原尾君居ますか」と案内を乞ふた。すると下女は「誰方で御座いますか」と訊ねるから名前を云はうとすると、「マア西川君だらう、入りたまへ」奥の方から主人公自らが返事する。つか／＼と行くと、「君の聲は一ぺんで分るよ」と机に向つて何やら調べながら云ふ。

「どうだ學校の先生は？」と訊ねると、「イヤもう原尾先生、原尾先生と大持てだ」とシテヤツタリ顔に云ふ。原尾君は都下で有名な某女學校の先生だ。大正二年出の文學士。

「ウム、君に是非聽かせたい話があるんだ」

「ホー何？」と己れはグイと腰掛を引寄せて一歩進み寄つた。

「實に面白い最新式の結婚法なんだ」と云ひつゝシガーに火を點けながら語り出した話は斯うだ。

原尾君の友人に藤田君(假名)と云ふのがゐた。彼は高等師範を出て其れから更に何を思ふたか京都大學の法科に學び、聽て其れを專攻して○船會社に勤めた恰度その頃から縁談があらゆる方面から持ち出された。然し藤田君は「自分が一眼見て之れこそ眞に天下第一品、日本一の美人である」と自分で確信したもので無くちや斷じて貰はないのだ」と云つて片ツ端から刎ね退けた。最初の間は、「オイ之はどうだ」「之は美人だ」之は屹度君の要求を満たすに足る淑女だ」と様々に寄せて來たが、藤田君は一眼見るか見ないで「なんだ此の位の」と許り一々べ

ン／＼勿ね付けて了つた。もう斯うなると誰れも親切の盡し甲斐のない男だと遂には誰れ一人妻君の妻の字も口出すものがなかつた。藤田君は却つて其れが幸ひだと云ふ風に、「自分の配偶者は須らく自分で求めるに如かず」と許り、暇さへあれば帝劇又はステーションへ出掛け、呀と驚嘆するほどの美人を物色してゐた。然し仲々見附からなかつた。兎角するうちに四年の年月が経過した。それでも彼は屈しなかつた。相變らず暇あれば其處らを物色して歩いてゐた。

所がツイ先達、友人が大阪へ行くので其れを見送りに東京驛へ入り、聽て切符を買つてブラットホームへ出た。二言三言友人と別離の挨拶を交換してゐる所へ「あッ此處だわ」と云つて、一人の品位あるお母様と令嬢とが、二等室の一隅からヌツクと出てゐる半白の老人の顔を見

て「オアー」と云ひつゝ進み寄つて「遅れまして」と叮嚀に挨拶した。老人は「ヤアどうも御遠方恐入りました」と答へつゝ喜ばし相に首を下げた。その場所が恰度藤田君の位置から二間位しか離れてゐなかつた。

列車の出發には一寸時間があつた藤田君は友人と語り合ふ丈け語り合つた後、もう喋べる材料もなくなつたから最早出發の時間を待つ許りだつたので、餘り友人と顔と顔とを見合せてゐるのもさまりが惡かつたから、其の眸をツイ外らして了つた。

其の外らされた所が、恰度令嬢と母君が半白老人に挨拶してゐる所だつた。

「アッ!!」と藤田君は思はず聲を上げた。同時に再び眼を照の様にして

凝視した。あゝ何たる美人だらう!! あゝ何たる端麗さであらう!! 之ぞ洵に自分が今日の日まで探ねあぐんでゐた理想の婦人だ!! 斯う思ふと何故か全身の血汐と云ふ血汐が心臓目がけて波打つて寄せて來たあゝそも今日は如何なる吉日ぞ、此の我が友人こそ當に福の神だ、此の友人が今日この時間に出發して呉れたればこそ初めて此の世にも類なき美人を發見することが出來たんだ、嬉しい、嬉しい。此麼嬉しいことは無い、自分が生を此の世に享けて死ぬ迄の數へ切れぬ楽しい春が一時にドツと押し寄せた思ひがしたので、肝心の見送り友人は斯うなると全くそつち退けになつて了つて、

「君! 僕は君と別れるのが悲しいよ」どころで無く、突然友人の手を確つかり握つて「嬉しいッ、嬉しいッ」と無茶苦茶に振り廻はした。



アッ何たる美人  
 此れ外技草の尋  
 ね求めてゐる理想  
 の婦人だ

てうお

何も知らぬ友人こそいゝ災難で、自分と別れるのが其處に嬉しいのかと思ふと、聊かブーンとせざるを得ぬ。その裡汽車はビーと動いた。藤田君は慌てゝ急に「や失敬」と云つた切り。そして身動きもしないで其の母娘は幾度も幾度もだん／＼遠ざかつて行く半白老人にお辭儀をしてゐたが、全く其の顔が見え無くなつて了ふと同時に、漸く我れに返つて「さア敏ちゃん（假名）歸りませう」と母は娘を促がした。娘は唯々とした。二人は悠やかに歩を運んだ。先刻から一心不亂に見詰めてゐた藤田君も漸つと氣が附いた。そして恰も吸ひつけられた様に其の後から隨いて行つた。

彼は其の途中幾度か令嬢の後姿のよさに驚嘆の叫びを上げざるを得なかつた、實に天下一品だ、見よ、あのスタイルのよさ、品位の氣高さ！

もう之ぞ吾が理想の妻だ、此の妻ならば己れは財産も要らぬ名譽も要らぬ、金縁眼鏡も要らぬと思ふた。

ブラットホームを出た母娘は懸て待たせてあつた俵夫を手招きした。そしてサツと身を載せ、娘の俵を先きに走らせ、次に自分が之に續いた。此の様子をボカンと見てゐた藤田君は今まで夢現の如く幻の如く映つてゐた美しき幻影が今や自分の眼界から全く遠ざからうとするので氣が氣でなく「あゝ何うしよう何うしよう」と胸搔き撈しらるゝ思ひで遙かに遠ざかつて行く俵の後をデーンと見詰めてゐたが、懸て何思ひけむ「ウムさうだ」と合點するが早いか「俵ッ」と息づかひ急がしく俵を呼んで、ヒラリと飛び乗り「あの俵の後へ」と一散に走らせた。俵夫は梶棒握つて韋駄天の如く追ふた。

先の俵は東京驛前の停留場から馬場先門前を過ぎて日比谷に出で、更に三宅坂方面に折れ青山指して駆ける、藤田君の俵は勿論それに續いた。

應て宏壯な邸宅の前で母娘の俵は止まつた。かと思ふと二人は淑やかに俵から下りて「御苦勞」の言葉のみを残して奥へ入つて行つた。

「此家だナ」と藤田君は急に自分の乗つてゐた俵を止め、電燈をすかして表札を読み、素早く住所番地を記憶して之で満足と許り俵をその儘自宅まで走らせ俵夫には過分を與へて其の勞に酬めて歸らした。

翌日藤田君は一切を詳しく原尾に物語つた。そして何分の助力を乞ふとひれ伏した。原尾君は他人の世話をすることが大好きな男である。一切を聞き終つてからトンと胸を叩いて見せ「よし引受けた」と許り、

直ぐ立上がつて教へられた其の家の附近へ行つて、あすこの御嬢様は何處の學校へ行つて被居るんですかと訊いた。すると第三高等女學校を今年卒業なさいましたと或る奥様が教へて呉れたので、めめたと許り幸ひ校長が自分の先輩なので、又其の足で學校へ赴き、校長に逢つて一伍一什を語り「さて何卒貴方が一つ媒妁になつて貰ひたい」と肉薄した。すると、校長は美しい白髪あたまを撫で、「そりや困る」と手を振つて「もう若い人の話には老人の出る幕ぢやない。貴方々で話して御覽なさい、あの御嬢さんは斯うした方です」と云つて校長は其の令嬢を説明した。

それに依ると其の令嬢は五年間學校は無缺席の皆勤で、然かも一年から卒業するまで最優等の成績で、操行は勿論上下の模範と仰がれ、容

男と生れたからにははかりる淑世  
 を妻に得るべし。しからば不化  
 までの譽言ぞかし  
 君に交りて茲に幾年 君もし  
 もの、哀を思し 呂サば助け  
 て救い給へ アーメン



てね

色の美しさは云はずもがな、背の高さに於てスタイルに於て之れ又學  
 校一。更に家庭はと云へば有名な資産家、世に斯慶に揃つた者は珍ら  
 しい。

之を聞いた原尾君飛び立つ許りに喜んで、すぐ藤田君の宅へ行つて此  
 事を報告すると、藤田君は「男と生れた冥加に斯かる淑女を妻に得る  
 ならば末代までの譽ぞかし」と原尾君を上座に据えて伏し拜み、君に  
 交はつて茲に幾年、君もし物の哀れを覺し召さば助けてたべ、救ふて  
 たべと涙を流さぬ許りに又頼み込んだ。

「よし必ず成就させて遣る！」と原尾君は例に依つて胸を叩いて見せ  
 直ぐ俵を呼んで青山の笠原邸（假名）へ向つた。何々女學校教諭と云  
 ふ名刺を出して御主人にと云ふと、直ぐ應接間に通された。暫らく待

つてゐると、應て應揚なる主人が現はれて来て、落着いた口調で、  
 「お待たせ申しました」と云ふ言葉の裡から品位既に四邊を拂つた。  
 「さて私に用事と云ふのは？」と主人は改まつた。

「ハッ」と流石の世話好きの原尾君も其の威嚴に打たれて暫し逡巡の  
 體であつたが、遂に意を決して一切を物語つた。最前から一句も洩ら  
 さず耳を傾けてゐた主人は、原尾君の總ての物語が終つた後で、

「お話の點はよく分りました。然し悪しからず思はんで下さい、折角  
 ですがキツバリお断りします」と悠やかに然かも嚴として云つた。原  
 尾君は、何しろ自分は結婚談では今迄幾十度とない經驗を持つてゐる  
 んだし、それに己れは雄辯であるから大概な他人を動かすことが出来  
 ると確信して遣つて來たんだから斯う返事された時の失望さはない。

暫しは「こゝは吾國を何百里離れて遠き滿洲の」見たいな淋しい悲し  
 い氣分に打たれて俯ひいて呆としてゐたが、斯くてはならしと勇を鼓  
 し、

「それぢや其の理由は？ 御參考までに聽かせて下さいませんか」と  
 云ひつゝ顔を上げた。すると主人はヤオラ身を起し、

「大體早い話がステーションで見染めたから娘を呉れ、其變簡單なこ  
 とで大切な娘を差上げることが出来ますか、假りに貴方だつたらオイ  
 ソレと承知しますか、之で失禮します」と云つてスイツと奥へ入つて  
 了つた。原尾君は斯うなると取つく島もなく、冷えたコーヒをグイ  
 と呑んで悄悄と外へ出た。そして藤田君を訪ねた、藤田君は待ちに待  
 ち切つてゐたのであらう、原尾君の顔を見るが早いか、



「オイどうだ？」と突然胸倉を取らむ許りにすり寄つた。原尾は力も勇もなくたゞ黙つて自分の指で自分の顔をさし、

「此の顔色を見たら大概様子が分るだらう」とガツカリ云ふ。

「どうもあんまり良好な徴候ではないな」

「良好どころか、君」とグーッと力を落して、

「君、倒れて呉れるな確かりせい、いゝか、まア此の話は諦らめ給へ、僕かアもう失敬する、左様なら」

「オツと待つてくれ、待つてくれ、君に其度量見を出して貰つちや、残された妻や子は、いゝやその残された此のぼ、ぼくが可哀相ぢやないか、一體どうだつたんだ、さアもう一度座り直して、き聽かせて呉れ給へ、よ、よ」

「君、そんな泣き聲を出して貰ふと僕かア胸一杯になる、君！ セチ  
辛い世の中ぢやなア」

「世の中の事は何うでもいい、一體何うだつた？」

「さらば汝憐れなる友よ」

「もう君が左様云ひ出すと早や胸がドキンとする」

「ドキンとするのに無理はない。話は物の見事に断はられた！」

すると藤田君「え？」と聽き直すが早いか見る見る眞青になつて、

「え、本當か、虚言云ふと承知せんぞ」と眼色が變つて來た。

「眼色が變つても駄目は駄目。あゝ箱根の山は天下の險——」

「唱歌どころぢやない。一伍一什を訊かせて呉れたら」

「ウム聽かす、汝憐れなる友よ」

「そりやもう分つた、それからが、き、聴きたいんだ」

「そ、その泣き聲を出されると己れが困るんだ。それぢや仕方がない、話してやらう。そら、先刻僕が俥に乗つて揚々と出掛けて行つたらう」と、いふを冒頭に、原尾君は詳しく會見の顛末を述べた。一切を聴き終つた藤田君の顔色は全で、北海道の鯁が干乾にされる様なうらめしい表情をした。そして漸つと青息の下から斯う云つた。

「ぢや此の話は全然駄目だらうか？」

「さア——」と原尾君餘程懲りたらしく餘りいゝ返事もせぬ。

「君、古語に云はく艱難汝を玉にす、東郷大將曰く各人それ奮勵努力せよ皇國の興廢……」

「もう云はなくつても其れ位のことでは知つてるよ」

「君、此の一舉にありだぞ、願くば君にして友情益々濃やかならむか、七度立ちて此の汝憐れなる友を救ひ給へ」

「所が先方の云ふ所又一理なきにしも非ずだからね」

「その一理を説明するのが君の技量だ、それ此の通り頼む、拜む」と藤田君手を合さむ許りにする。

「よし君がそれ程に云ふのなら僕再び立たう、君宜しく枕を高うして可也」

「ところが餘んまり枕を高う出来んぢやないか、快々として樂まぬ夢ばかり見るだらうなア」

「心配するな、僕は明日鋒を新たにして至誠以つて神を動かして呉れる」

「頼んだぞ、確つかと」

「よしッ、ぢや失敬」

「ぢや失敬、フレー、フレー媒妁さんッ」

原尾君は翌日又赴いた。然し依然として先方の言分は變らなかつた。けれども原尾君は其の翌日も亦其の翌日も根氣よく訪ねて衷心を披瀝した。矢つ張りそれも不調に終つた。又々其の翌日彼は遂に藤田君を連れて訪ねて行つた。生憎その日主人は不在だつたので、母君に面會を求め、そして二人心から頼み入つたすると、母人は幾度か頷いた後で、「貴方々が其れ程熱心に仰しやつて下さるなら、屹度娘を貰つた後で可愛がつて下さるでせうね」と訊いた。すると藤田君は可愛がるウ、可愛がるウと茲を先途と許り可愛がるウに獅嚙みついた。すると、

「それぢや私から、改めて主人に説き勧めませう」と出た。その時の二人の嬉しさ！

「奥様、たのんますぞ、確つかりたのんますぞ」と念を入れるが早いか、喜び餘つて、

「あなうれしいイ、喜ばしいイ」と、ビヨン／＼勿ね出した、二人は聽て夢我夢中になつて飛び出し、殊に藤田君は「君こそ實に天下に得難き親友だ」

と俄かに原尾君を持ち上げて、自宅へ目掛けて「ワツシヨ／＼／＼」それから話は矢の如く順調に進んだ。流石の主人公も外からと内からの寄手に協かね、遂に冠を脱いで了つたのだ。

恰度己れが原尾君を訪問した前日の正午、帝國ホテルで盛大なる披露

宴が催されたとの事である。

「ちや其の藤田君と云ふ人はさぞ喜んでゐるだらう」と己れは原尾君に訊ねると、

「もうそれは云ふだけ野暮さ、僕は昨日突然に後からポーンと脊中を強く叩いて、お目出度うと云つて遣つた。大將どう云ふかと思ふたら、モツと叩いてくれ、モツと強く叩いてくれ、と請求してゐたよ、萬事はそれで察す可し」。

世にも幸運なる藤田君と云ふのは、先刻書いた通り京都山の法學士で、日本一の○船會社に勤め、先頃神戸の支店次長となつて赴任した△藤君その人である。最後に當つて花嫁の住所は青山と書いたのは假住所であることを附記しておく。

## 日本よさらば

◎船は静かに、故郷よさらば

一世の好男子エチ茶岡君は愈々二日正午天洋丸で洋行と御座る、彼は其の神妙なる鼻のあたまを丸く撫でながら「ハツハ、」と収まつた所、眉目彌々益々秀麗たらざるは無い。此の好男子を見送るは一は我々の名譽となし、一は又我々の光榮とする所ぞとその醜さも、その一寸見られる顔も論なく大に彼が行を盛んにすることに衆決忽ち一致した。當日、僕亦此の佳人の爲めに朝まだきボンと飛んで起きあがると云ふ壯舉を演じ、素早く洋服に身を堅めて「それッ」と許り見送りの光榮を擲んで、人後に落ちずと云ふ勢で「天洋丸へ天洋丸へ」と全で

自分が洋行する様な意気込みだ。新大久保驛より横濱さくら木町行の切符を買つて乗り込んだ。

品川で乗換した。そして「彼」が来てゐないかと切りに物色したが、それに似たらしい様子の男にも出會はなかつた。「彼」とは安田君である。

安田君と己れは前日逢つた時に、明日君と僕とは品川で待合はさう、九時前後に」と堅く約束して別れたんだ、安田君は物々敷く「ウム」と頷づいて見せてゐたから確かに己れは彼れがもう待合せてゐて呉れてゐるものとして出かけて來たんだ。すると見えない、ぢやヒヨツとするると大將平生が平生で落着いた性分だから未だ出掛けないのかも知れぬと思ふたので、ブラットホームのベンチに暫しウムと構へて己れ

は腰を据えてゐた。

さくら木町行は幾度も幾度も來た、然しヂツと心急わしさを壓へ付けて彼の爲めに鎮座の勞を取つてゐたが、卅分も待つてもまだ來ない、時計を見ると十時が直ぐだ。「どうしたのだろ」と幾度か立つて階段を見詰めた、その氣配だにない。恰度そこへ又さくら木町行が來た、もう後は何うでもなれと許り心配の裡にもフラ〜となつてツイ乗つて了つた、乗つてからもう一車位待つても宜かつたんだと後悔して見たが追付かぬ、まゝよと許り控つかと尻を落着かせる。前夜三時近くまで原稿に夢中になつてゐた故か馬鹿に臉が重い、兎もすればウツラウツラとするので眼を閉ぢて寝ようとしたが、列車の中では嘗て一度も眠らうと試みて眠りに就いたことがない程過敏な神経の所有者ときて

ゐるんだから、勿論成功する所でない。兎角する裡にさくら木町へ着いた。

さうだ茶岡君の横濱の支店の住所はノートに書いてあるんだからと、ポケットを探つた所生憎どうしたものか見附らない、それぢや昨夜机の上においた儘置き忘れて了つたんだらうと、困つた哩と許り頭を抱えた。

アツ此變時には電話帳を調べるに限ると思ふて、彼の商會の名を浮べて、驛前の自働電話室へ駆け込んだ、生憎一人の女が電話口で焦つた相に怒鳴り込んでゐる、構ふもんかと、そこにあつた電話帳を手に執るが早いか繰つて見た。すると果して一見明瞭。それを忘れぬ様にと口の中で繰返し繰返し又驛内へ駆け込んだ、雨がザア／＼降つてゐ

たからだ。

暫しボカンと空る見詰めてると、

「旦那、俵ですか」

ハツピを着た俵夫頭が云ふ。

「オー俵だ」と無意識に應ずると、サツと小手を高く翳すと見る間に一臺の俵が飛ぶ様に來た。ヒラリと其れにフンゾつて「本濱町へ」と命ずる、俵は韋駄天の如く走つた。

下ろされて扉を排して入つて行くと、

「オウ皆變は貴方を待つてゐるんですよ、早く二階へ」と云はれて吃驚、それぢや何時の間にか安田君も來たのかと上つて行くと、果して、「やあ遅かつたな」と第一に聲をかけたのは安田君だ「大分品川で待

つたんだぞ」と愚痴ると「君が遅いので先きへ失敬した、まサイダでも飲みたまへ」ぢや罪は寧ろ僕にあると頭を掻いた、主人公茶岡君と「やア」「やア」の撃劍の掛聲見たいな挨拶を交換し、更に一同にス  
ーウ。

眼の前の机の上に所狭きまで並べられたサイダーの一本を手にするが早いカボンとはちいてゴクン／＼音させて、飲み乾す間もなく、  
「それぢや之で皆塵揃ふたから」と立上がる、自動車にしようかと云ふ話があつたが、埠頭まで餘り近いので、それは馬鹿らしいとあつてテクルことになる。茶岡君のみは「諸君お先きへ」と許り幌の中から聲をかけて飛んで行つて了ふ、雨は細かくなつた。  
氣持のいい、税關内の石疊を踏んで行くこと二町ばかり、見ると其處

に成る程形容詞に偽りもなき山の如き天丸丸が横附けにされて乗客を待ち構へてゐる。

「此船かい」と分り切つたことを訊く。

「ウン」と安田君は懶さうに返事したが、聽て「アツ君、乗船券を持

つてるかい？」と妙なことを訊く。

「乗船券？ 知らないよ」と怪訝な顔をする、

「乗船券がなくちや船へ上れないんだよ」

「フーン」と己れは急に頬べたをフクラがした。

考へても見たまへ、皆塵が愉快相に船へあがつて行く時僕ばかりが陸上にゐて指を叩へて見上げてゐるのかと思ふと、これ以上の「噫無情」があるかい。

己れは快々と樂しまん顔してゐると、安田君は支那に永くゐた故か碑文でも讀む様な難かしい顔して同情の眉をひそめてゐたが、

「誰か持つてゐるかも知れない」と獨り言云ひつゝ、後からゾロ／＼来る大勢に大聲あけて、

「乗船券二枚持つてる者は手を上げッ」

すると、細い顔の髯の長い男が「オー」と返事するが早いか其の瘠せた手を中天高く翳した。

「もう心配はない」と安田君は己れを慰めて又歩いて行く。乗船券は汽船會社へ行つて親しく貰つて呉るんだ相な。これがなくちや船に乗れないとは今日始めて耳にした所だ。

船と陸との間に急造の橋が懸つてゐる、その上を多くの見送り人やら

乗客やらが押すな押すなの有様で行く。僕も亦乗船券を手にするが早いか骨格逞しい鬼でも挫く様な髯男に其れを示して臆て又其の一員になつて上つて行く。試みに下をのぞいて見ると乗船券を持たない者共が物足らぬ淋しい表情で羨し相に見上げてゐる。ワイイ。先着の茶岡君の顔を見るが早いか一同「室は何處だ、何處だ」と群がり訊ねる。

「君等は一等の而かも特別待遇者の室を見たことはないだらう」と茶岡君は鼻うごめかして先に立つ、ゾロ／＼と隨いて行く。

「さア此處だ、後學の爲めに見ておけ」と云はれて覗いた部屋は三疊敷程の廣さ、隅には上と下とに寢臺がある。正面に大きな鏡が此の突然の侵入者の多くの珍らしい顔を面白相に寫して御座る。



出来るんだらうと思ふて、名残りにと記念にと一寸坐つて尻の印象をつけておいた。

達田君は序でに二等室までも案内して呉れる、一等と較べたら何んとなしに見劣りする、矢つ張り四百何十圓と二百何十圓との旅費の相違を部室に現はしてゐる。

最後に何も見學だと云ふので船底近い三等室まで覗きに行つた、そこには豚の様に人間がゴロ／＼大勢各自の寢臺の上に轉がつてゐた、異様の臭氣がブーンと鼻を打つ、そして全で蒸し殺す様な暑さだ、よく辛棒出来るものだと感じて引上げた、三等室は風俗懷亂を恐れてか男と女とは全然別室にしてある。彼等は幾十人一緒の部室にゐるんだ。それから見ると二等は隔世の感がある、況んや一等に於てをや、全で

ホテルの客と木賃宿の客みたいな相違だ、人種差別ぢやない金種差別から先づ唱へねばなるまい。

「オ、苦しかつた」と達田君と僕とは思はず胸をトン／＼叩いて甲板へ上つて來た。

「矢張り乗るなら一等だね」

「切に同感だね」と口々に云つて甲板の尖端から尖端へと一ツ一ツに好奇心の眼を光らせて歩いてゆく、中頃へ來るとマレイ人や支那人やらが甲板を埋めてゐる、彼等老若男女の群れは或は坐り或は立つて、怪訝相な眼付で僕等を凝視した。下等船員か？ それなら女や子供は必要がない、して見れば矢つ張り米國へ出稼ぎに行くんだろ。一躍千金は皆彼等の胸に宿つてゐる玉條だらう。西洋人は？ と見れば大抵

「君の寢臺は？」と訊ねると、

「下の方だ、二重ベットだよ」

「オヤ、ダブルベットだ、それぢや君一人ぢや大に物足らんだろ」と彌次る奴がある。

「イヤ大に今日までの餘韻嫻々たる薫香に甘んじてゐた方が却つて有難いかも知れぬ」

「捧持して餘香を拜す——君は先づ菅公の資格を備へてゐる」

「して見ると此の菅公は洋服は着てゐる、英語は自由自在、流石は大正の菅公だ」とスウと首を長うして、

「その腰掛けも臨時のベットだよ」と反對の一隅にある腰掛を指さし、

「船舶拂底、乗客充滿の聲は遂に斯かることを餘儀なくせしめたん

だね、それにしても其處で寝る人は氣の毒だ」と茶岡君同船相憐れむの同情聲をあげる、一同「御尤も」とばかり謹聴した。

「西川君、西川君」と後から肩を叩くものがある、見ると達田君だ。

「君、図書室や食堂を見たか」

「イヤまだ、案内して呉れ」

「ぢや隨いて来い」と、多くの見送人から僕のみを引抜いて行く。歩いて行く毎に己れは幾度か「アッ」と驚愕の聲をあげた、全て輪奐の美を極めたホテルの様な設備だもの、立派な階段まである。絨毛まで敷き詰めてある、軍艦とは流石に大に趣が違ふ哩。

食堂も圖書室も成程いつか見た汽船内の設備を書いてあつた雑誌の寫眞の通りだと思ふた、そして僕は何時此處所で本を讀める様な洋行が

出来るんだらうと思ふて、名残りにと記念にと一寸坐つて尻の印象をつけておいた。

達田君は序でに二等室までも案内して呉れる、一等と較べたら何んとなしに見劣りする、矢つ張り四百何十圓と二百何十圓との旅費の相違を部室に現はしてゐる。

最後に何も見學だと云ふので船底近い三等室まで覗きに行つた、そこには豚の様に人間がゴロ／＼大勢各自の寢臺の上に轉がつてゐた、異様の臭氣がブーンと鼻を打つ、そして全で蒸し殺す様な暑さだ、よく辛棒出来るものだと感じて引上げた、三等室は風俗懷亂を恐れてか男と女とは全然別室にしてある。彼等は幾十人一緒の部室にゐるんだ。それから見ると二等は隔世の感がある、況んや一等に於てをや、全で

ホテルの客と木賃宿の客みたいな相違だ、人種差別ぢやない金種差別から先づ唱へねばなるまい。

「オ、苦しかつた」と達田君と僕とは思はず胸をトン／＼叩いて甲板へ上つて来た。

「矢張り乗るなら一等だね」

「切に同感だね」と口々に云つて甲板の尖端から尖端へと一ツ一ツに好奇心の眼を光らせて歩いてゆく、中頃へ來るとマレイ人や支那人やらが甲板を埋めてゐる、彼等老若男女の群れは或は坐り或は立つて、怪訝相な眼付で僕等を凝視した。下等船員か？ それなら女や子供は必要がない、して見れば矢つ張り米國へ出稼ぎに行くんだろ。一躍千金は皆彼等の胸に宿つてゐる玉條だらう。西洋人は？ と見れば大抵

甲板の鐵柵に倚りかゝつて面白さうに話してゐる、或はベンチに腰を下ろして煙草を煙らしてゐるものがある。そこへ一人の日本人が巧みな英語を使つて密そりカフスボタンなどを賣り付けてゐる、仲には手に執つて見る者もあるが大抵は首を横に振つて御座る。

「オー悉皆忘れてゐた」と云ひながら茶岡君が飛んで来て、

「達田君、甲板の僕の安樂椅子の交渉が済んでゐるか」と息セキ問ふ。

「オウ、もう疾づくに」と云ひながら達田君は茶岡君を案内して先きに立つて前甲板に導き、そこに所狭きまで並べてあつた椅子の一つを指して「これだよ」と云つた。

「イヤどうも有難う」と茶岡君悉皆満悦の體だ。

誰れでも使つていゝと思はれる甲板上の安樂椅子でも矢つ張り使用權

を申込まなくちや指を叩へて甲板上に立つてゐなくちやならぬのだと云ふ、どこまでも金の力で無くちやピクとも動きやしない。

突然、ガラン／＼と鳴る、もう見送人の下りる時刻だと達田君は囁いた、多くの洋行出来ない連中の腰は急に浮き立つた。三人は陸上に向つた甲板上を歩いた。

「オー肝心の茶岡君が何處へ行つたのかと心配してゐたら」と云つて、見送り人はドヤ／＼と茶岡君を圍んだ、それに一々挨拶してゐる刹那の感慨は流石に無量であつたらう。

「西川君一寸」と安田君は腕を引張る。

「え？」と引張られて行くと、安田君は甲板から下を見下ろし、

「あれをヂツと見てゐたまへ、その裡屹度ボロボロと泣き出すに違ひ

ない、君は斯う云ふ刹那を大に研究してよく必要がある」と罪なことを云つて多くの乗船券なしの連中の仰いだ顔を指しながら云つた。

「面白い光景だナ」と面白さうに己れは見下ろした、成程眼玉が赤く張れてゐる者もある。ハンケチを押し當てゝゐる者もある。ケロリとした顔もあればヘツヘツへと笑つた顔まである、内地雑居顔だ。第二のガラン／＼が鳴り響いた。

「さア下りるよ」と誰れ云ふとなく云ふ。茶岡君に近いものから「御機嫌よう」

「御大事に」が始まる。その裡僕の番になつた。

「頼んでゐいた通信は確つかといゝか」

「分つた、特別勉強して」

「ぢや御機嫌よう」と僕の手は堅く／＼握つた。

ゾロ／＼と押され／＼と急造の橋を下りて行く、鬼みtainな容貌怪偉な例の男は矢つ張り立つてゐた。

船から總て吐き出されて了ふと、橋は直ちに取外された、もう何んと悶いても觸れることが出来ぬ。雨は相變らずこまかい。

藏光君と僕とは他の見送人と離れて少しく後方に陣した、そして先刻上から見下ろして嘲笑した泣面の一員になつて甲板の茶岡君を見上げた、茶岡君の人品は最負眼ぢやないが一等光つてゐた。

どこから流行したんだらう、どこの國から始まつたのか、その時甲板の各乗客からドン／＼紙糸が下へ投げられた。その投げられた一端を掴んで上と下との人間は其れを唯一の別れの最後の絆として離さな

い。見る／＼赤紫の無数の紙糸は入り亂れ／＼て美觀譬へむ方もない。一人で十幾本も纏んでゐる乗客もある。マニラから歸航らしい薄黒くマニラ色に變色した西洋人の老夫婦は最もハシヤイで、キャツ／＼云つてゐた。ひとり其の中に前甲板にゐた溶かす様な眸を持つた若い金髪の女のあでやかさと、後甲板に鐵柵にもたれて人々の別れに打ち騒ぐ様を他所にしてチーッと鳩の様に眼を張つて雨にしぶる横濱の街を名残惜し相に見詰めてゐた万感搔き迫るの思ひを含んだ金髪の女の姿は私をして再び凝視せしめることの出来なかつた程哀れにも美しい情緒だつた。私はそれを一眼見て何か知ら胸一杯の想ひがした。突然、けた／＼ましい汽笛が耳を聳する許りに鳴り渡つた。と、別れに相應はしい哀調を帯びた「ほたるの光り」の樂隊が乗客の胸にも見

送り人の胸にも浸み渡る様に流れた、氣の弱い女連中は早くもハンケチを眼に當てた。  
 さア愈々ぞと眸を上ぐれば今まで笑顔で應對してゐた茶岡君の顔は見／＼緊張して、流石に名残の惜しまれてか眉宇の間に微かに愁雲を漂はせ、帽子を高く翳して、一人々々に深長に別れの挨拶を交換する容姿のよさてない、其の態度の鮮かさ、立派さ、それが皆自然である、己れは感に入つて見惚れて、最後に慌て、帽子を脱いだ。  
 巨船は静々と動いた、殆ど動いてゐるか何うか分らぬ位な微かな微動である。赤紫の紙糸は次第に張り詰めた。  
 誰れの口からとなく「萬ざーい」と、その聲は悲壯に空氣をゆるがせた。すると之を相圖に乗客も見送り人も期せずして雨の中から帽子

を脱いで高く振つた。紙テップは次第に前方から切れて行く、だん／＼切れて来た。遂に茶岡君と僕の持つ糸に其の運命がきた。張り詰め張り詰めた糸はブツリと音がしたかと思ふと上と下にサツと舞ひ上つた。二人は見合してニッコと最後の別れに笑むだ。  
 (次からは其の茶岡君からの通信である、洋行する人の参考の爲め特に掲載して行く。洋行出来ない我々は之れで大に知つたか振りを養成する積りなり)

◆我輩日本人を捉へて

第一信。

他見男君、

出發の際は君等は揃ひも揃ふて泣き眞似して、表情たつぷり悲し氣に見せかけてゐたぞ、甲板の上から君等のゐた所までズツと低いので、僕を旨々その手に乗せてポロポロ落させる畫策だつたらしいが、其の手は喰ふもンかい。

端然として軽く帽子を振つて應答した所鮮かな手際だつたる、西洋人だつてあゝ云ふ旨い調子にや行かないぜ。君も洋行する時あの呼吸が肝心だよ。

さて東洋の貴公子殊に僕を乗せた巨船天洋丸が、千種雑多な客種を乗せて静々と横濱埠頭を離れた。斯くて君等が蟻の様な小さい人間に見えた時僕はやつと甲板の藤椅子に身を落着けて、シガーに火を點けたそしてスウと思ふ存分吸ひ込んで、フウと又思ふ存分吐き出した、あ

の一吸ひはまさに千金の價あらしめたね。

港外に出た所、何故か船はピタリと泊まつた、不思議だぞと西洋人共に附和雷同してガヤ／＼云つてると、三等客に急病人が出来、然かもそれが稍重態だと云ふので、病人だけを戻して了ふんだと云ふんだ。陰で一日の假泊となつた故國を離れむとする身とて流石に幾分の嬉しさを感じた、矢つ張り後髪を引かるゝ所あつたりと見えたり。俄か仕立のハイカラで音楽に伴はれて（所謂鳴物入）で食堂へ堂々構へて入つて行つたまでは上出来だつたが、デナーの献立表が丸つ切り分らず、幾度か知つたか振りしようとしたが此の風采が其れを許さず、仕方がないので隣客の注文を穴賢と許りかしこみ敬ひ、ツンと取りすまして「僕も御同様」と體裁はいゝものゝ一から十まで御同様

に獅噛つく所、これでも日本橋では一番の物の分つた紳士だつたからね。

やアゐる、ゐる、内外の美人雲か霞かハタ雪か。何んでも美人には最善最高の町重を盡したら上紳士を以つて遇せらるゝと聽いてゐたから、階段の上り下りは申すに及ばず今便所から出た許りと云ふ姿も物かは、女さへ見付ければ「ハハッ」と許り食客然とモチ／＼して道を譲る所、自分の嫌に見せたいものだ。

知らず斯くして得るもの何んぞ、目下はまだ不明、その裡いゝことがあつたら無線電信を奮發する。

船にはバザーがあつて何んでも買へる、不自由なし、風采も今まで見た中で僕が一番光彩陸離、心配して呉れるな。（以上君等に見送られた



其の晩、港外、天洋丸にて 茶岡生)

第二信。

他見男君、

兎に角昨日の出来事を書く。改めて又云ふ迄もなく君の洋行に資せむ爲めだ。

ラ ツ バ

一時頃に久し振りで全で「大學出の兵隊さん」を思ひ出す様な軽快なラツバが船の隅から隅までズーツと響き渡つた。其の調べこそ違ふが、こりや屹度カキコメ／＼で、食事に違ひないと賢明なる我輩早くも推察したもの、大きな聲も出せぬが食堂の卓へは何う云つた具合に付くのか、このところ大に賢明でない。先づ此慶時には斯界の先輩毛

唐共の様子如何にと許り、食堂の前をフラ／＼偵察をやる。何か知らぬが食堂の右の入口は人々黒山の様ぢや。老若男女押すな／＼で一向内部の様子に眼が届かぬ。だん／＼時間が経つ、押され押されて小一時間も経つが悲しい哉いたましい哉一皿も有り付け相でない。思案に餘つて日本人の先輩(但し洋行での)の室へ行つて婉曲に其れとなく「食事は最早済みましたか」とやる。まだ／＼との事で二人揃ふて食堂へ進軍。ところが肝心の此の先輩も勝手不案内と見えて餘り要領を得ない。けに心細い先輩もあつたものだ。止むを得ず我れと我身の頬べたを振り上げてポイーに聴く。ポイーは「お晝は御随意に」と云ふので其れではと逸早く卓に獅噉付くと、再びポイーが来て一寸と云ふ、其の後から情けない顔して随つて行くと、例の食堂の右の入口の

所に毛唐の事務員がゐて一々名前の上へ、エックしてゐる、成程それ  
 ぢや此の男に姓名を名乗らなくちや武士は喰はねど高楊子になるんだ  
 つたかと、慌て、エチ、茶岡と自慢の發音やると、「オーライ」ときたた、  
 よしと許り再び食卓に座る。

晩には厨夫長に話して、日本人の友人三名と一日本婦人（森利商事  
 會社員令夫人）に僕と都合三名で一テーブルを航海中使用に定めた、  
 是で先づ／＼今後食事にかけては泰山の安さ思ひぢや。

献立表

（一時にドツと押し寄せたら假令廣いと云つても狭い船中大マゴにマ  
 ゴつくと云ふので第一回と第二回の二度に別ち、一回と二回との間に  
 四十五分を距つ献立表は参考の爲め二三枚集めて送る、大に有難く思

ふてくれ。

我等幸に卓を日本人同志で取つたので、吾々のそれ等日本人と云  
 ふ肩書連中、今は誰に恥を受ける虞れもないので、急に氣が軽くなり、  
 研究だア研究だアと研究を無茶苦茶に振り廻はして「之を喰つて見よ  
 う、之にしよう」とボーイを奴隷の如く追ひ廻はして研究的態度に没  
 頭してゐるが、メニュー丈け附きつけられたでは何が何んだか分りや  
 しない、オイ察してくれピフテキ、オムレツ、カツレツ、ライスカレ  
 ーの外洋食の名を碌に知らぬときてるんだから、他人が旨さうに頬張  
 つてゐる様子を横眼で睨みながらモジ／＼してゐるばかりで、注文  
 しようにも注文する肝心の名を知らぬとは何ちうみじめなザマだろ。  
 あゝ東京戀しや別れの辛さ。

便所へ行くと一人の老毛唐が何やら間違つきぬいてゐる。僕が其側を通り過ぎようとする、訴へる様な眼付して、拙手な日本語で「お湯」とか何とか發音したが、其聲事は此方の小便に何等の關係がないと云ふので、知らん顔して過ぎて行くと、大將ムツとしたのか、誰れが見ても歴平とした我輩日本紳士を捉へて、英語で「あんた日本語が出来ますか」と皮肉つたも皮肉つたり、僕はカーツとしたので矢つ張り英語で態と而かも田舎辯で「日本語なんてサツバリ知らねえだ!!」そして悠々尻目にかけて引上げてやつた。

此の老毛唐の間諛つくも無理はない、各人が若しお風呂を欲したなら、豫めバースボーイに其の時間を通告して置いて、そしてボーイの「オ

ーライ」と云ふ報らせに依つて始めて立つて行くのだ、それを老毛唐さん少つとも知らなかつたと見える。毛唐の癖に其聲分り切つたことを僕日本人に聴く奴があるか。もう船が出るらしい、急いで筆を擱く。

(三日朝、天洋丸にて 茶岡生)

◆黒髪よ、香ひよ!!

他見男君、

三日の午後船は太平洋に出ました。紺碧の深い色をした海は唯波の山の連続である、高い甲板から船の行手を見て居ると、丁度飛行機から起臥する山脈の上を見下す時は斯くもあらうかと思はる、コバルトの深い色した輝いた小山が動いて寄せては去り、去りては寄せ来る上

を二万三千噸の船はスルリ／＼と滑つて行く。此の水の山こそ幾千年來の色であらう、然しながら之が我が住む地球の上だと思ふと、大崎の僕の居宅の庭の芝生に對する様な一種の愛着の念禁じない。突然此の碧藍の小丘を飛ぶ水晶の鳥がある、其形は小さいが其の力強い飛揚の鋭さ！ 彼等は無限の生命を持つかに見える、二三四又五其の翼は透明、其の體は淡緑、何んと云ふ清い姿であらう。是が飛魚だ。此の透明鳥の去つたあたりに突然黒色の巨軀でヌツクと立つた脊鰭を有する海魔が弧形を畫いて波間に出沒する一二三、五、十、二十群魔は或は近く或は遠く船に添ふて進む、大鯨である相な。何と云ふ濶い海の懷であらう、彼等は幾千年來の此の海に棲むと見える、嬉々として戯るゝが如く又怒つて襲ふが如くである。自然は廣

い、そして自由だ。斯慶事を考へてると突然遙か彼方の波間に木の葉の如き漁舟が見える、シガアの烟の如き淡い烟を上げて矢の如く進む、三隻四隻舟は巨浪に上つたり沈んだり是は人間と云ふ動物の運動である。

今迄飛魚の精銳に驚き、海魔の頑大にあざれた目は新たに人間の大胆を嘆ぜざるを得ぬ。魚も魔も人も共に自然兒である。彼等は之れ皆生類である。

此慶事を考へながら甲板を見ると其所には又人形の如き愛らしい毛唐の子供が毛布に包まれてスヤ／＼と眠つて居る、天國なる哉。

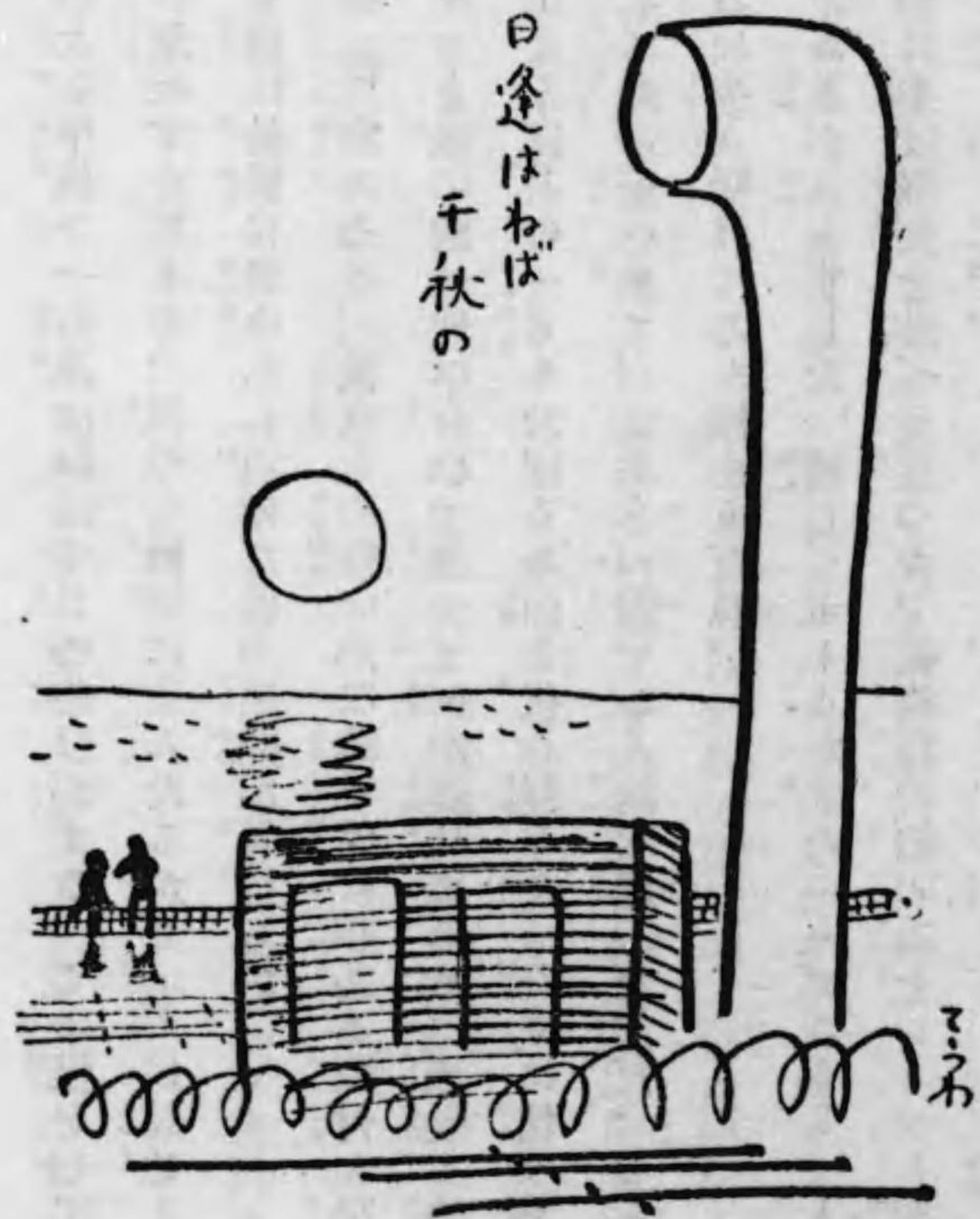
洋魔!! 之は太平洋上の魔ではない、天洋丸上の魔だ、如何に美しく飾り立てゝも彼等の顔面に表はれた無智と荒寥の象徴は容易に其の常

の婦人でない事が分る。年の頃は皆二十二三歳、顎から襟元かけて雪白に塗り立て、頬からはローズ色に紅を施し、裾短かな絹の衣に高い踵。甲板の遊戯に巧みなのは常に洋上を往復する證據であらう。桑港までの四百圓の乗船料を拂つて猶且つ大に得る所ありとはサテく有難い御娯賣で御座る。水浴が始まると華な水浴着を着て男の中で其の大尻を動かして仰向けに泳ぐ。子曰く非禮勿見と、僕は引上げて来た。(天洋丸上 茶岡生)

他見男君、

僕の前に一人の美人が居る。但し日本の女なり。毎日海ばかり見てゐて少々此の頃快々となつた僕は淺ましい哉此の年齢してゐながら、矢つ張り寂寥を慰める遊戯心からか時ならぬ戀心が萌した。何よりの證

一日逢はわば  
千秋の



據は其の女を甲板で一日逢はねば千日の想ひがする、この僕をして其れまでに思はすんだもの、以つて如何に美人たるかを幸に諒せよ。何よりも僕は綺麗に真中から別けたあの黒髪が氣持ちがいい。

僕は今通信室にゐる、彼女も有難いかな時々僕に媚ある眼付を呈しつゝチャンと眼の前に向ひ合ひて座つて何か認めてゐる。黒髪よ香よ!! あはよくば其の一寸もたげるお顔を伏し拜みたい許りに僕は素知らぬ顔して此の室へ来て、さあらぬ體でおん前を選んだんだ。つらつら惟みるに少々喝れてゐた觀ありだね。

「奥様、お茶が入りました」稍してボーイが來た。「バアさう?」と彼女は淑かに半ば微笑を浮べて立つた、裾模様の絹の衣をシュツと捌きながら、僕に軽く頭を下げて去つた。去つてから僕はガツカリ何も書

くのが厭になつた、斯うなると同船の三井のA君が羨しい、彼は彼女と自由に會話する特權を持つてゐるんだもの。

彼女の美はソモ何處にあるかに就て一寸申上げたい光榮を有するが、情けない哉僕は君みたいに形容詞を巧みに使ふ素質の人間に出來上がつてゐない、美は恰もそれ禪の悟の様なものだ、何故ならば直覺すべきものであるからである。だから之を生じつか説明すると、あはれや實物に距たること千里猶遠しの感がある。然し次の方程式に依つて先づ以つて大略の想像を願ひたい。

黒髪は澤山十真中分ケ十二重脛十鼻高十口締十笑窪十腰柳十指白魚十  
大ダイヤリ二十三才十高雅十聰明

僕は布哇で聞いた「月夜の虹物語」に就いて書かうと思ふたんだ、然

し今彼女が急にゐなくなつたのでガツカリ筆探る勇氣が出ぬ。  
明日彼女を新たに見たその勇氣で一瀉千里で書く。(十日晩、布哇にて  
茶岡生)

◆金髪の處女がニツとして

他見男君、

夕食の時彼女は何んの意味か僕の客室の前に立つてゐた、あゝ嬉しや  
之れ感應の結果か。それとも大に共鳴を感じたからであらうか。さア  
矢でも鐵砲でも来い、急に元氣になつたぞ、此の勢で布哇名物「月  
夜の虹」はお茶の子サイサイでござい。

月夜の虹物語

望めば茫々たる太平洋の上にまんまるい月が上ると、折柄西の彼方夕  
立の後へ鮮かな七色の虹が美しい橋をかけた、僕は今それを見詰めて  
ゐる。

そも此の虹は昔しその昔布哇に絶世の美人が一人ゐた。ある王子がフ  
ト此女を見染めて執着おく能はず、遂に云ひ寄つて妃となし、宮中花  
香る庭園のバナ、より甘い戀の囁きに酔ふてゐた。

所が此の王子或日何思ひけむ決然立つて「余は戀ては此の國の王とな  
る可き身なるに、美女に魂奪はれ何うするものぞ」と慨然として直  
ちに天下の形勢洞察と云ふ遠大なる志望の下に、意を決して遙か海を  
越へ遊學せむと此の由妃に物語つた。

妃は身を切らるゝの思ひで其の一言一句を聴いてゐたが、遂にはあま

りの王子の決心の堅きに否みも出来ず「それでは一年間限りよ」と、恰も或女が横濱埠頭で僕に耳語した様に堅く約束して愛人の首途を送つた。

月日は茲に一ヶ年早くも経過した。

妃は今日こそは戀びと愛人の姿が見ゆるか明日こそ船は來たらむかと毎日海岸の岩に立つて遙かに小手を翳したこと幾度、それでも王子が歸つて來ぬので悲歎遣る瀬なく毎日泣きに泣き崩れてゐた。

一夜涙に暮れながら、月明りに照して海を見詰めてゐると奇怪や待ちこがれてゐた王子は海を涉つて歸つて來るではないか。やゝれ嬉しやオ、戀人よと突然我身を忘れて縋付くと、何時しか王子の姿がバツと消へた。オヤと思ふと又もや水上に姿が見える。今度こそはと緊かり

抱いた其の人こそは慕ひ死するが如き想ひしてゐた王子その人にはあらで、聴くも怖ろしい大なる鱈であつた。

鱈は妃の裾を喰ひ縛るが早いか其の儘スーッと海の彼方へ〜と引張つて行つた。妃は、さては此の魔者に嘯されたかと悔しがつてゐると鱈は最早此の邊まで來ればよしと思ふたのか、偕改めて云ふやう「實は我れこそはお前の待ち焦れてゐた王子の化身である。聽いてくれ約束の一年を想ふて過日歸路についた所、途中で大風雨に出會し、その爲め船は沈没し、我れ再び姿を現はすことが出来なかつた。

今斯うして御身が海岸の巖頭高く立つて己れを待つてゐるのを遙かに見上げては逆でもチーッとして居られず遂に鱈と成つて現はれて來た次第である。悪く思ふて呉れるなど、云ひ終るや否や其の喰へた妃の



裾を空中に向つてカーツと吐き上げた、それを月夜の虹物語である。

(今夜はこれ丈け、十一日布哇天洋丸にて 茶岡生)

他見男さん、

裏の繪ハガキ、此處が今夜の宿です。

御影石の山岳は晝は恰も白雪の様な肌ですが、暮れかゝる時淡い紫のペールを纏ふてゐる様な美しさです。

ホテルのメイドは水色の着物に白色のボンネットを着て御給仕をして呉れます。山の娘の健康と無邪氣で今夜のデンナの嬉しいこと。(グレシヤ、ポイントホルにて 茶岡生)

他見男さん、

グレシヤのポイントの峯に、たそがれ時の薄い明りがぼーツとしてゐ

ます。八千尺と云ふ断崖に懸つてゐる千尺に餘る瀑布は闇の中から光る様に凄く落下してゐます。

高山のホテルのデンナはもう濟みました、シガーを啣へて居ると、色彩のいゝ洋装の美人が何を感じたかニツコリ僕を見て行きました。

曰く次の一文だけは帝大助教授F君よりの來簡です、恰度茶岡君のと一緒に來ましたから、添へて置きます)

他見男兄、

ワシントンに來ました、誠に閑静な、御役人ばかりの町です、此處には相生旅館と云ふ日本人の宿屋があつて漬物、茶漬、テンプラ、刺身、そば、何んでも御座れで毎日腹づゝみを打つて居ります。

洋食だとホンの御嬢様ほどしか喰べませんが日本食となれば六七杯は

平げ候也

美しき奥様健在なりや。

F

生

あな嬉し、喜ばし

●大學出の郡長さん

己れは今箱根塔の澤は新玉の湯の二階にゴロリとなつてゐる、そして昨日からの行動を顧みて思はず噴き出してゐる。

一體この旅行は全然妻の爲めに催されたものである。妻が先日おれを捉へて、

「貴方は何時も旅行ばかりしてゐらしやる癖に一度も私を連れて出ないんですもの、今度は私と静子の二人限りでどこかへ行つて来るわ、女と云ふものは家にばかり留守番するものだ」と云ふ貴方の惨たらしい頭脳を見事に撃破して見せますから」と云ふ大變な権幕だ。考へて見

れば己れも夫婦して別つ可き筈の樂しみを己れ一人で占領してゐる。洵に量見の悪い旦那様であつた。今斯うして座敷の真中で靜かに征められると成程己れが悪かつた。だから己れは、ム、ムと唸つた。

「幾程唸つたつて駄目ぢやありませんか、私に廿日間程お暇を下さい、どこかへ悠つくり行つて遊んで來るわ」

「そんなに旅に出たいのか、旅と云ふものは決して君が想像してゐる程愉快なものぢやないよ、行つてみたい、屹度己れの傍が戀しくなるに定まつてゐる、この己れでさへ君の傍に三日もゐないと、あゝ戀しきいとしき我が妻はと想ふんだよ」

「もう其麼古い手には乗りません、男らしく行つて來いと云へませんか、わたし一度も家以外の所で宿泊つたことがないんですもの！」

「よしッ行つて來い」

「まあ急に捌けたわねえ、斯くてこそ理解力のある旦那様と申すものなれ、西川他見男さん萬が一」

「ヘン」

「變な返事ねえ、ねえ貴方どこへ行きませう？」

「どこでも君の勝手さ」

「さうね」と一寸小首を傾けて、

「それでは今から相談して來るわ」と云つて、靜子を小脇に抱えて外へプイと飛んで行つたかと思ふと懸て直ぐ戻つて來た。屹度仲のいゝ猪狩さんの奥様や鈴木さんの奥様や、上田さんの奥様の御高見如何を求めに行つたらしい。

「わたし伊香保へ行つて来るわ、でも飯坂温泉がいいと仰しやる方もあるし、それに伊豆の修善寺がいいと薦める方もあるし、意見がまち／＼なの、孰方がいいか知ら、貴方どつち好むある？」

「己れ？ 己れなら飯坂か又は伊豆の伊東へ行くさ、細野は飯坂最負だし、僕は伊東だ」

「そのうち孰つちがいいの？」

「さア、飯坂は山の中だから、溪流潺々たるに耳を傾けようと思へば飯坂だ。伊東は海上より涼風颯々と吹來り、肴はビチ／＼生きたのばかり、だから要するに君は山の景に觸れたいと思ふなら前者、若しそれビチ／＼が欲しけりや後者だ」

「どつちもいゝわ、でも第一貴方の意見は？」

「僕かア伊東だ」

「何故？」

「経験から見て断定する」

「でも鈴木さんの奥様は飯坂がいいと仰言つてよ」

「ぢや飯坂へ行きたまへ、俗臭紛々としてゐる相だ」

「ぢや謹んで親愛なる我が旦那さまを信用して伊東へ行くわ。ですけど一人ぢや淋しいわ、ねえ貴方私しこれ以上親切にして下さいと申しませんか、伊東まで送つて来て下さらない？」

そこで己れは考へた。色々多忙な爲め此の月は何處へも旅しなかつたのだ。早速どこかへ出かけて氣を晴らしたいと思ふてゐた矢先だつたから恰度いゝ幸だ。それに女と云ふものは兎もすれば人に頼りたが

るものだから、己れが此處で赤ンペーをしたなら、折角感興に捉はれた妻の心が、又ウンザリするだらうと思ふたので、聊か憐愍の情を催うして「よしッ」と答へた。

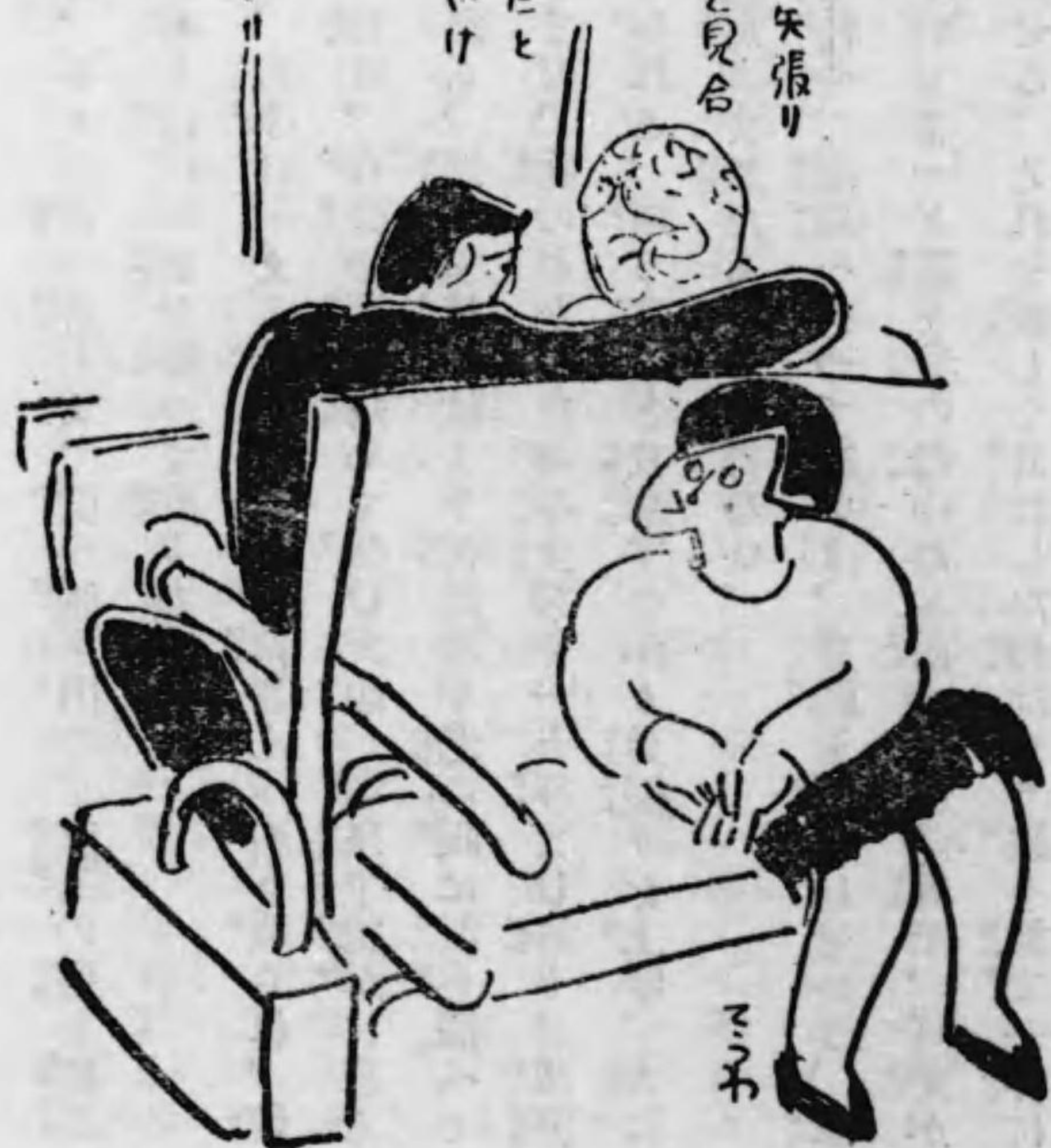
「わたし廿日間行つて来るわ、貴方一人置いてけぼりよ、御飯なんか三度が三度他所であがりになつて下さい、いゝこと？」

それも己れの承諾する所となつた。早速妻の里へ電話をかけて、母に来て貰ひ僕が見送つて歸つて来る迄の留守を頼み、萬が一あつたら大變だと云ふので貴重品は悉く行李に詰め、隣家の猪狩さんへ預けることに話は順調に進んだ。

さア妻の喜びつたらない、温泉へつれて行つて下さる、これでこそ矢張り私が最初貴方と見合した時どことなく蟲の好く方だと直感した

### 温泉行

これでこそ 矢張り  
最初貴方と見合  
したとき  
何となく  
虫の好く方だと  
直感したわけ  
あつたワ



丈けあつたわと、イヤに古い昔しまで引つ張り出して讚美の聲を絶たしめず、こゝ暫らく己れは頸を擦つて許りぬた。

愈々當日になる、行李は「え、確かに」と猪狩さんへ引き取られ、留守番に來た妻の母は、自分の腹を痛めて生むだ娘が温泉で暢かに暮らすと云ふ吉報だから、悪い氣持の仕よう筈はなく老の眼に涙を湛へて「結構な旦那さまだ、物のわかつた御亭主ぢや」と拜まひ許りに感涙に咽んで喜んで呉れる、斯うなると我輩すつかり男振りを上げ、大に理解力のある旦那さま顔たらざるを得ない。

「ウム、ウム増枝や、温泉へ行つて來いよ、身體を大事にせいよ、思ふ存分遊んでおいでよ」と態と妻の母のゐる前で黄色い聲で、可愛がり聲を出して見せる。これを親しく耳にした母はもう眼を涙で一杯に

して、

「コレ有難くお禮を云ふんですぞ、三千世界訪ねても此塵いゝ旦那さまはありやしないよ」と妻を捉へて、有難さを振り廻はして聽かして御座る。己れは萬更悪い氣持ちのことでないから涼しい顔して聽かん様な顔して聽いてをつて遣つた。妻め仲々伶俐に立ち廻つてゐる哩とばかり横目にかけて己れをデロリ。何分廿日間も家を不在にすると云ふんだから妻は大きなトランクに凡そ自分の着物の之れと云ふ品は入る丈け詰め、それに無聊を掻消す爲めにとあつて、好きな英書から歌集をギッシリ其の上から詰めくゝり、之で何か忘れものがないかとコクリとしてゐたが、もう無いと思ふたかイデ〜お化粧の準備にかゝる。己れは其の日止むを得ざる用事があつたので後で品川で待ち合は

すことにして一先づさきに家を出た。そして安宅商會へ行つた。生憎主人公の安宅君がゐない。どこへ行つたんだと女給に訊くと、今しがたまで神戸の湯淺さんと云ふ方と、中屋さんと云ふ方とお出ましになつた許りだと云ふ。

「へーえ、湯淺君に、中西君？ しッ、しまつたなアー、もう一足のことだつた」と己れは思はず歎息を洩らした。

湯淺君と云ふのは矢つ張り僕と同郷、然かもツイ近くの主馬町に住んでゐたんだ、神戸高商を出て、才幹は到る所で認められ目下は大會社の支配人である、己れと相見ざること殆んど十年。すつかり忘れてゐたんだが、先々月安宅君に近況を聽いてから急に逢ひたくなり一層どうせ暇な身體だから態々神戸まで行かかと思ひ込んでゐたんだ。そ

の湯淺君がホンの一足で出たとは何うしたこつたい。中屋重治君だつてさうだ。中屋君は確か京都大學を出てからもう六年位経つだらう、頭腦の非常にいい男で、高文を優秀な成績でパスするが早いか、直ぐ島根縣の理事官になつて赴任し、それか、又同縣の郡長に轉じたかと思ふと、先日の官報で見ると臺灣總督府財務局事務官に榮轉してゐる。之も安宅君から聽いたんだが、中屋君は彼の日本三美人の一人大阪吉崎李枝子さんの姉さんの其の娘を貰つてツイ先達築地の精養軒で盛大なる披露宴があつたばかりだつたと云ふ。現に其の席に列席した安宅君は口を極めて「中屋君の妻君は實に美人だ、羨しい程美人だ。道理で中屋君最初から終りまでニコ／＼してゐたつけ、今度逢つた際にウンと冷評してやらなくちや」と云つてゐた。その中屋君は僕より確か

級が一級上だつたけど、二人は互に柔道をやつたのだから随分道場で組んだり組まれたり、負かしたり負けたりしたことがあつた。爾來幾年、杳として其の消息に接しなかつた所へ、此の近況だ。己れは矢つ張り「あゝ逢ひたいなアー」と切りに思ひ込んでゐたんだ。その中屋君だ、その中屋重治君が人もあらうに逢ひたい／＼と思ひ詰めてゐた湯淺君と偶然と云はうか一緒に打連れて安宅君を訪ねて來るとは何たる奇遇だらう、その奇遇を一瞬にして遁がした己れの無念さたらぬ。

己れは暫らく呆として應接室の机に俯伏して口惜しがつてゐた。

それにしても己れも今日は時間に限りのある身體だ、いつもなら長く待つてゐても構はぬが、今日はそれは不可ぬ。成る可く早く歸つて來

て呉れりやいゝがと暫らく待つてゐたが、仲々戻つて來そうにもない、その裡だん／＼時間が経つた。おれは時計と睨みつこで地團太踏んでゐたが、刻々迫まるタイムの壓迫に猶豫もならず、それぢや安宅君には歸つて來てから逢はうと決心して席をグイと立上がつた。その時、その時、扉の外からドヤ／＼と靴音がした。やア歸つて來たなツと、瞳を嬉しさに凝らして見てゐると、サツと開けて入り込んで來たのは、

ヤツ湯淺君だツ、

ヤツ中屋君だツ、

「オーツ湯淺君ツ」

突然己れが斯う呼んだので、相手は己れの顔を何者と許りヂツと見据えた、その筈だ、十年も逢はないんだもの！



彼は繁々己れを見入つてゐたかと思ふと、グワラ／＼と顔を崩して、  
 「オーツ西川君ぢやないかッ」と駈ける様に近づいたのを抱く様にし  
 て己れは「やーア、實に暫らくだねえー」と、グン／＼握り、  
 「顔が大して變つちやゐないねえー」と互に見合はし、懐舊しさりな  
 り。

中屋君は此の二人の様子をボカンと見てゐた。そして矢つ張り己れを  
 チツと見詰めてゐたが、突然、横から、

「君は西川君だね」とジロ／＼見て云ふ。

「ウン、暫らくだつたなア」と感激に満ちて己れは云つた。

「悉皆親父顔になつたので、見當が附かなかつたよ。痛快な日だッ」と、意外な所で意外な男に逢つたと云ふ表情だ。三人は無意識に腰を

かけた。

「君は大に成金になつたと云ふぢやないか、早速奢つて貰はうか、ハ  
 ツハ……」

と聲高らかに湯淺君云ふ。

「イヤ君こそ成金と云ふ話だぞ」とシツペイ返しすると、

「いゝや、それよりも素敵な美人を貰つた中屋君を黙つて見通すこと  
 があるものか、あゝ云ふ天下第一品の美人を貰つて我々を大に中毒させ  
 るなんて怪しからん男だよ、大に君からも絞つてくれたまへ」

「さうか、オイ中屋君、君は怪しからんね、何故もつと醜もないのを  
 貰つて先づ先づ之で互によかつたと我々を安心させなかつたんだ  
 ッ」

「イヤ僕よりか」と中屋君すつかり頭を掻いて、

「君は湯淺君の妻君を知つてゐて其慶事を云ふのかい？」

「いや」

「湯淺君の妻君て、君そりやもう何んと形容していいか、花か霞か、將た雲か……」

「將た墨かと來るんだらう」と湯淺君横から口を出す。

「實に美人だよ、それと較べたら僕の妻なんか」

「それ、それ、貫つて僅か十日しか経たない裡に妻と云ふ位だからね僕等一年ばかり恥かしくて云へなかつたものだよ、それを斯うも平氣で云ふんだから餘程妻君に自信がなくちや兎ても、ねえ君」

「オイ、オイ、參つた、參つたてたら湯淺君」と中屋君大分痛められ

て御座る。

そこで己れは審判官になつて、

兎に角中屋君の妻君の方がヨリ美人だと判決する。

理由

第一、貫つて來たホヤ／＼、充分に活動の餘裕があること。

第二、音に名高き李枝子夫人と血縁たること。

第三、中屋君は古來より品行方正を以つて鳴りしを以つて福音遂に今日あらしめたこと。

どうだ恐れ入つたか。

「恐入つた判決だなア」と頭掻き、

「君等に向ふと協はんよ、殊に西川君は幾年振りで逢つたか分らない

のに、會ふか會はないのに此の筆法で己れを意地目るんだもの、奥野  
他見男先生もう許してくれ」

「ウハツハ……」

「ウハツハ……」

己れは時々もう時間が時間かと思ふては時計を出して見るので、湯淺  
君、

「君、どこかへ行くのか」

「ウン、今から伊東へ」

「伊東へ？ 何時に」

「もう品川まで卅五分しかない」

「もう十分話して行け、自動車を飛ばせろ。僕も明後日さいべりや丸

で米國へ行かなくちやならんで君と逢ふのが之れ限りだ」

「え？ 米國？」

「ウン紐育へ」

「旨いなア」

「君も一通行つたら何うだ？」

「行きたいと思ふてゐるんだけど。いゝことがあるぜ米國へ行つたら」

「そりや」と急に湯淺君ニコ／＼した。己れも中屋君も何を思ふたか、

矢の張りニツコリ。

「君、君、中屋君」と己れは時間が時間だから其の話をヘシ折つて、

「君の郡長は面白かつたろ」

「郡長？ ウハ、今で君の筆法で行つたら君の書いた大學出の

兵隊さん位の材料はあるよ、此處書生さんでも一度は郡長だつたから  
ねえ」

「だから面白いんだ」

「天機時に或は君に話すこともあるよ」

「一遍聴かせてくれ」と云ふが早いかグルリツと又湯淺君に向き直り、

「オイ素敵なことがあつたら通信たのむ」

「よしッ」と云ふ彼の返事するが早いか、今度は又中屋君の方へ急が  
し相に首を廻らしながら、

「君二十五日まで滞在？ さうか、それぢや僕二三日裡に歸つて来る  
から又逢はう、安宅君と三人で、いゝか、確かに。」

それぢや諸君失敬」と云ふが早いか突然帽子を持つて立ち上がった。

「オット待て西川君、新しく著書が出来たら此處へ、一寸待つてくれ」  
と云ふて急がしくポケットから手帳を出して紙を千切るが早いかスラ  
くと宛名を書いて、

「此處へ送つてくれ、頼む」

「よしッ、ぢや失敬ッ」

「失敬ッ」

#### ◆上品な少女が

それ遅くなつたら品川に待ち疲れてゐる妻や子は涙をフツ飛ばして怒  
鳴り喚くことだらうと思ふて、駆ける様にして昇降機に近づき、あは  
たゞしく呼鈴を押すが早いか、ヒラリと乗つて、下りて又一目散。白

木屋の前に立つて空いた自動車がないか、来ないかと眼を皿の様にして物色したが、折も悪しや一臺も来ない、時計を見ると廿五分しかない。詮方がないそれぢや市街自動車で行けつと突然そこにあつた自動車に飛び乗つて、品川へ行くかと尋ねると、これは新宿までと途方もないことを云ふ、アレーと又飛び下りて、えいッ、えいッといま／＼し相に氣を焦々させながら日本橋方面から若しや空いた自動車がと見たが矢つ張り駄目。

すると恰度今しも品川行の電車が發車しようとしてゐる、どうでもなれと許り無二無三に追つ駈けて飛び乗り、ホット一息して時計を出して見るともう廿分しかない。駄目だと思はず慨歎の叫びを上げようとしてハツと氣が附いた。

新橋から乗つて行きや差支へがないのだ、白木屋の前から新橋までは直ぐだ、十二三分で行ける。さうすればあの汽車はどうせ新橋で止まるんだから其れに間に逢へばいい、それにしても其の新橋までが間に合ふか何うかと時計と首つ引きの體たらく。而かも立つたり坐つたり、氣が氣でない、それを車掌早くも悟つたか、

「どこまで被居るんです？」と到頭訊いた。

「新橋まで、もう十分間で行かせようか」

「十分！」と自分も時計を出して見て、

「行けませう」と、ませうと云ふ覺束ない安心力だつたが、直ぐ又、

「なアに大丈夫です」と今度は斷定ある福音を此の己れの耳に聽かせて呉れた時には何處に嬉しかつたらう、もうスンデの所で「君、握手

「ッ」と出さうだつた。  
幸ひ直ぐ前へ走る電車は満員で而かも乗降が非常に烈しかったが、此の電車は乗客も少なく又乗降も無かつたので何等の停車なしに快い許りに走つた。

新橋ステーション前で下りるが早いか、息セキ駆けつけ、切符も夢中で買ひ韋駄天の勢ひでプラットホームへ駆けつけると、あゝ幸ひなる哉、運とは全く之れだ、恰度そこへ列車が轟と入つて来た瞬間だ。早速乗つたかと思ふと直ぐ發車!! げに貴重なりし一秒かな。  
品川へ着く頃から己れは首をヌツクと突き出して用意怠らなかつた。聽てプラットホームへ引きずられる如く列車が進行して行く、早くもホカンと眞蒼になつて憤慨の形相恐ろしくブリ／＼してゐる妻の姿を

見付けたものだから、

「オーイツ、妻ツ、オーイツ此處だツ」と己れは聲高く呼びつゝ手を高く翳して聲を限りに呼んだ、早くも之を認めた妻は、

「あれ、あれ、あそこへ父ちやまが」何が何やら呆としてゐる愛嬢静子を握つてゐた手をグン／＼させて注意し、突然それもどかしと許り小腕に抱えて一散に己れのゐた列車へと駆け込んだ。それが非常に慌てゝゐたので髪は俄かに亂れ、自慢の手下袋は空に躍つて二ツ三ツ何やら飛び出た。

息セキ乗込んで、突然他人目もはじからず、

「貴方つてたら、貴方つてたら」と泣聲を出しながら「どんなに私は心配したかシタン／＼」と憾みが嵩じて遂に聊か涙聲に變つたので、

「何も云ふナ、分つた、分つた」と他人前で旦那さまの威厳を損ぜない範囲で平謝りに謝りながら、

「あ、好かつた!!」と始めて大きな安堵の呼吸をする。

「どうして遅れたんです!」

「實は幾年振りと云ふ珍友に偶然逢つたものだから」と云ひながら、早くも豫防が肝心だと許り「心配したろ、氣をもひだろ、氣が氣でなかつたろ、無理はない、この己れだつて其慶事されたら腹が立つさ」と大に同情を汲々として注ぎ、心頭に燃え立つ怒りを、懸命になつてなだめて遣つたので、漸つとのこと、

「まア乗れたから何は兎もあれい、鹽梅だつたわ」と云ふたのを機會に之れ幸ひと許り、

「静ちやんい、子だ、い、子だよ、これボツボ、汽車だよ、ボツボの汽車と云つて御覽」そんなこと云ふて旨く胡麻化し、

「アレ、アレ、ふね、舟が見えるでせう?」

「ふね」と子供は嬉し相に、

「かアちやまよツ、ふね、ふね」と連呼して返事をうながすので、母アちやまも子供には罪がないと許り、始めてにっこり笑つて見せて、

「おふねよ」

「おふね?」と静子が訊き直すと、

「えいおふね、父ちやまは舟と仰有つたけど、ふねちやありません、

おふね」

と云つて聊か父ちやまを當て擦つて一本參つたさせ、己れが苦蟲つぶ

した様な顔をしたのを見て、先づ之れで一寸ばかり敵打ちしてやつたと云ふ様な快心の笑を浮べて、それから機嫌が直つたので、先づ先づいゝ鹽梅だつたと人知れず横を向いてニヤリ。

全く始めて汽車に乗つた子供の眼のあたり見るもの聴くもの皆初めてなので其の上機嫌さてない、いつしか其れに釣り込まれて先刻まで互に目の玉變へて應酬してゐた僕等二人の夫婦は何時の間にか笑顔を作つて「ねえ貴方」と來れば「なアんだい」と優しいこと、優しいこと、忽ちにして濃厚な夫婦振りを發揮して大に近隣をして指を啣へさす。

茲に大變な失敗を演じた。それは此の汽車は横須賀國府津行であることを旅行案内で知つてゐたので之を選んだのだ。だから此の汽車に乗

つてさへゐたら國府津まで行くものだと思つてゐたんだ。

所が大船を過ぎて次に鎌倉へ來た。オヤ此の汽車は鎌倉へ來るのか知らとコクリと傾けたが飽く迄國府津行を信じてゐた僕は落着拂つて悠然としてゐた。次に又逗子と云ふ、オヤ此前國府津へ行つた時には逗子は通らなかつた筈だがと思ふてゐる裡に發車して今度は田子々々と云ふ、ハテ變だ哩と餘りの不思議さに窓から首を出して見た。船が澤山ある。こりや怪しいと、折柄そこを通つた車掌に、

「國府津へ行きませぬ」と訊いた。

「國府津? 國府津へは行きませんよ、國府津行なら先刻の大船で乗換です」と、膽つ玉の飛び上る返事だ。

「ヘーン!」





「この列車は二つになつてゐたんです、横須賀行と國府津行と、國府津は大船で切れたんです、後ろの方の列車に乗りましたら好かつたんです」と云ふ。こりや大變と慌てフタめきそれツと峻かしてあつべら顔の妻と無邪氣に遊んでゐた娘の二人を急遽下ろし、續いて己れも「馬鹿見た、馬鹿見た」と云ひながら下りた。

そして誰れ一人ゐないブラットホームに悄然として佇むだ。

「馬鹿ね、貴方知らなかつたんですか」

「ウム」と大に振はない。

「調べてなかつたんですか」

「ウム」と愈々振はない。

「汽船の時間に間に合ひませぬね」

「ウムー」と益々振はない。

先般知人鎮目桃泉さんから寄贈を受けた伊東案内記に依つて見ると、其の追白の欄に今年七月から伊東丸と云ふヨット汽船が朝の十一時と夕方の六時に國府津を出ると書いてあつた、その夕方の六時發の間に合はす豫定で汽車に乗つて來たんだ。そして國府津へ着いてから少し餘裕があつたらいと云ふので五時國府津着の積りであつたのだ。然るに今斯うして飛んでもない方面へ引かれて了つて、再び大船まで戻され、そこから又國府津行を待つてゐたら兎ても間に合ひ相でもない、然し急行だつたら或は辛くもと云ふ危ない所で六時に間に合ふかも知れなかつた。兎も角大船まで行く汽車が早く來ればいい、それではなくちや何う見當つけるにも見當の附け様方法がなかつたんだ。妻も

己れも淋しい遣る瀬ない顔をして唯それを待つた。

折柄幾百人と見る職工が群をなしてプラットホームへ入つて來た。彼等は一樣にジロ／＼と多數を恃んで我等三人の顔を覗き見た、中には囁いてる奴まである。

待つこと七分、漸く汽車が來た。二等の室は三人限りで占められた。發車間もなく大雨は豪然として降りしきつた。

「この雨ぢや兎ても今日汽船は出さうもない」と己れは空を見上げながら云つた。

「夕雨ですよ、直ぐ晴れますよ、夕雨の晴れた後は却つて風ますからね」と妻はそれに反對した。

「夕雨なものか、屹度降り續くよ」と其の反對が癢に障つて聊かムツ

とした調子で云つた、妻は黙つて了つた、然し「いまに見て被居い、  
屹度晴れ上がりますから」てな顔付である。

鎌倉からは「ドヤ／＼と乗り込んだ、流石やつぱり鎌倉だわいと感心す  
る。

やつと大船へ着いた。下りるや否や車掌に國府津の汽車は？ と訊ね  
ると、もう一二分で急行が來ますと云ふ。我々は乗り過まつたんだか  
らそれに乗つて國府津へ行つてもいいだらうと訊くと、そりや不可ま  
せん、急行列車だから急行券をお買ひなさいと云ふ。ツイ大船から國  
府津まで卅分かそこいらである。それに急行券は馬鹿らしい骨頂だ。  
ぢや其の次の列車は？ と訊ねると、十分お待ちになればと云ふ。ど  
うせ汽船に乗り遅れるらしいんだから、それぢや其の列車を待たうと

なつた。

急行列車は直ぐ來て直ぐ出た。果して十分後今度は普通列車が來た。  
それに乗つた。そして斯う云ふ虫のいゝ段取りをした。

それは去年の暮伊東發國府津行の汽船が恰度一時間許り遅れたことが  
あつた、己れは其の時「時間不勵行なのか」と怒鳴つた所「汽船は汽  
車の様に正しく行きません、大抵は遅れるのが相場ですよ」と答へら  
れて、その上叱られもしなかつたことがあつたんだ。

今それを思ひ出した、そして此の雨だ、屹度若し今日汽船が出るんで  
あつたら矢つ張り一時間位遅れるだらうと思ふた。今はそれを唯一の  
頼みとして粟よくば其の運を掴むよりか外に途はないと思ふた。然し  
大方この雨だもの、多分は出まいとも高を括つて見たりもしてゐた。

その裡一天急に晴れあがつた、妻はそれ見ると云ふ顔をした。すると又曇り、又ザーツと云ふ篠突く雨だ、今度は己れが急によみがへつた様に其れ見ると云ふ顔をする、二人は無言で自分の確信の争ひをしてゐた。

その列車の二等室は満員であつた、一人の親父が素知らぬ顔して我物顔に敷布を敷いて寝た振りしてゐたのが、子供を抱いた己れの眼にムカ／＼ツとした。矢庭に駈け寄つて、その厚顔しさを叱する様に「此處少しあけて下さい」と命令する様に云つた、何か云つたら大にやり込めて遣らうと己れの唇は少しく震へてゐた。親父は澁々座り起きた。そしてデロリと己れを険しい眼で睨む様にした、己れも「ナニ糞」と許り睨みかへした。

「オイ此處へ座れ」と己れは妻に命じた、妻は氣の毒相な顔して子供を己れから抱き取つて氣兼ねい／＼割り込んだ。先刻の列車には氣持のいい笑顔を持つた上品な少女の姉妹が三人も向ひに座つてゐたが、此の列車に此の親父。唯無暗にムカツ腹が立つ。蓋し乗り遅れた鬱憤が大部分ある。

◆そつと口を耳元へ寄せて

國府津で下りて、驛前の待合室へ入り、そこにゐた女中に「伊東行のヨット汽船が出たか」と何より先きに尋ねると、「え？ ヨット？」と妙な聲して、

「其廢物はありませんよ、汽船のお間違ひでせう」と云ふ。

伊東案内記にあれ程確かに載つてゐたんだから此の女中或は知らないのかも知れぬと思ふたので、試みに傍にゐた男衆の肩を叩いて訊いて見た、すると矢つ張り「ヨット汽船なんてありません、汽船なら一日一回十二時頃に出る切り、しかも其れは昨日も今日も波が荒いので出ないでゐます」と取りつく島もない返事だ。それぢや汽車を幾程乗り過ぎたつて要するに國府津着が遅れた許りで結局同ンなじことだ。慌てる必要は少つともありやしない、まア急行に乗らなかつた丈け大助りだつた。

急行に乗つたわ汽船が出なかつたわとあつて見い、もうスンでのこと  
で泣面に蜂と云ふ無残の體たらくだつたのだ。

「オイ、どうしよう、ヨット汽船なんて無いんだ相だ、矢つ張り汽船

ばかりだ、汽船も今日はお出ないんだ相な。出ても十二時ぢやどうせ駄目だつたのさ」と投げる様に云ふ。

「どうしませう」と妻は鬼界が島の俊寛みたいな聲を出す。

「ま、仕方がない、それぢや此處で今日は泊つて明日行くことにしよう」

と、二人は面白くない顔をして、葛屋旅館へ入つた。通された部屋はあんまり綺麗でもなかつたので、ブーンと脹れて「何だ此の部屋は」と鬱憤を飛んだ所で洩らしたので「え、直ぐ隣が空きますから少々我慢して下さい」とある。

碌に部屋へ足も踏まず欄干に倚つて眸を大海に走らす、ザ、ツと眼下に大波は砂をズーツと白く染めては又返し、又染めて行く。成程平坦

な太平洋も今日は白濤空に躍つてゐた。海と云ふものを始めて見た子供は不思議相に「水、水」と叫んでゐたが「海、海」と教へて遣ると、海？と云ひながら始めて見た嬉しさと驚愕に暫しヂツと身動きもしないで見詰めてゐる、空は晴れたり曇つたり降り出したり。

「どうぞ此方へ」と隣室の掃除が出来たのか、女中は「済みませんでした」とモミ手をしながら物云ふた。通された其の部室は此の家一等の眺望に好位置を占めた場所であつた。

先づ浴衣に着代へ、案内されて湯槽に行く、全て田舎の風呂場の様に汚ない、そして薄暗い、旅の第一日の印象はもうウンザリさせられた。けれども其の夕餐の旨さつたら無かつた、肴は全て勤いてゐる様な新らしさだ。どれをつまむでも拙いと思ふものは一つも無かつた。

「ホンとに此麼旨味しい肴は始めてよ」といつも食不進を藩してゐた妻は餘程旨かつたと見えて片ツ端から平げた。

「東京にゐたら逆ても此麼旨味しいのは喰べられせんわ」と今までの總ての不快感は此の食膳一つの爲めに悉皆一掃されて、もう何等の不満もなかつた。あまりの旨さに一年振りで己れは酒を呼び、妻は又サイダーを注文した。直ぐ濱邊へ散歩に行く、十五夜の月はキラ／＼美しかった。

其の夜、疲勞からか、馴れぬ夜具の故か、波のさゞめきに邪魔されてか兎もすれば轉々として夢は結ばれなかつた、何事にも不關心な子供でさへ幾度かスツクと起き上がつて家へ歸らう、歸らうと云ひ出した、圓かなまどろみもしない裡に空は白々とした。

見ると雨は矢つ張り止み相でもない、波は前日に増して凄く躍つてゐる。女中に訊くと勿論此日は汽船が出ませんと断定して了ふ。その裡妻は急に頭痛して來出したと云つて腑伏せになつた儘倒れて了ふと云ふ始末、子供は「オツ乳オツ乳」と聲を限りに強請る。叱る泣く、「私は具合が悪いから貴方がお守りして下さい」と、ウン／＼の裡から妻は云ふ、そして之れぢや兎ても苦しいから東京へ戻りませうと云ふ、頭痛のするのは睡眠不足からだ、まあ悠つくり寝た方がいゝと云つて己れは子供を抱えて濱邊へ行つた。波が躍つて迫る毎に「怖い、怖い」と静ちやんはブル／＼して獅噛み付いた。それぢやと云つて宿へ戻り、部室へ行かずに其の儘湯殿へ抱つこする。湯はまだぬるかつた。然し外に遊ばす方法もないからと云ふので、え、構ふもんかと許

り、ツルツル眞裸にしてやる、そして湯の中で手拭で様々の藝當を凝らして時間を移す。斯くすること二時間、漸く出て部室へ來ると、妻は足音にキヨロンと眼をあけて、  
 「あゝ漸つと頭痛が癒つた、睡眠不足だつたわねえ」と云つて、  
 「どうしませう、今から」と云ふ。  
 「伊東行が駄目なら戻るより外はない、それとも箱根へ行かうか」  
 「箱根へ？ え、然うしませう、それがいゝわ」と大喜びで賛成の聲を出したが、直ぐ又「この雨ぢや何處へ行つたつて詰らないわ」と空を見い見い云ふ。  
 雨は瀧の様に降つて地面から匆ね上がつてゐる。ゴーツと云ふ凄しい勢で横さまに降さしぶる。

「暫らく形勢を觀望しよう」とゴロリとなつたが、何時まで經つても止み相でない。

「斯うしてヂツとしてゐちや詰らない、兎も角出て仕舞はう」と云つて、直ぐ支度に取りかゝる。

「ぢや今から箱根へ行くんですか」

「ステーションへ入つてからのこつた、東京へ戻るか、箱根へ行くか、突嗟の決斷で定める」

斯う云つて慌たゞしく下女を呼び、トランクを階下へ運ばせた。勘定を済まして下りて行くと妻の下駄が見えない「それぢや矢つ張り今朝のお客が知つてゐて履き違へて行つたんだ」と下女はブリ／＼云ふ。今朝男女二人の客があつた、食事を済ますや否や直ぐ歸ると云つた。

玄關に立つて「わたしの下駄を頂戴」と女は云つたので之れですかと云つて今眼の前にあるのを指した。すると「いゝえ違ひます、此方の方です」と云つて妻の下駄を指した。下女は變だ哩、昨夜確か此の下駄を履いて僕の妻が散歩に出られた筈だと思ひながらも、ツイ浮々と其れを並べた。すると其の女はそれを履くが早いか躊躇として男と手を引いて去つて了つたと云ふ。執方へ？ その時試みにと訊くと小田原へ行きますと云つてた癖に汽車に乗つたらしいと下女は附け加へた

「不都合なお客さんだわねえ」と、おかみさんは青筋立て、其處にある汚ない今しも切れ相な緒を見い／＼云つた。

「困つたわ、豈夫此塵泥々した下駄を履くのも厭だわ、どこか此の邊で賣つてないでせうか」と妻は下女を顧みた。



「マア、お氣の毒でしたわねえ、どうも済みません、ちよ、一寸お待ち下さいませ」と云つておかみさんは奥へ駈けて行つたかと思ふと、直ぐ新しい下駄を手にして出て来て、

「奥様、済みませんが之で我慢なすつて下さい詰らないんですけど」妻は之を見て烈しく首を振つて、

「マア新しいんぢやありませんか、宜しう御座いますよ、此處事されますと却つて此方が痛み入りますから」と、堅く固辭したが、到頭「マア、マア」と云つて押し付けられて了ひ「それでは」と云つて其れを履いて「済みませんでした」と挨拶し「左様なら御機嫌よう、行つて被居いませ」と、多くの者から一時に浴せられながら、一人の女中と手代の二人に傘をさして貰つてステーションへ行く。

箱根へ行くにしても、東京へ戻るにしても最早伊東へ行かぬとなればトランクは邪魔になつて仕方がないから、之れだけは送り返して仕舞ふとあつて直ぐ切符を買つて預けて了ふ。行くか、戻るか。刹那はどう閃めくか。

「旦那、箱根へ被行るなら自動車を呼びませうか」と手代が横から機嫌を取る様に云ふ。そつと今しがた少々握らしたので、何か一つ忠義振りをして見せたいと云ふ量見らしい。突嗟己れは決めた。

「よしッ呼んでくれ」と命ずるが早い、グルリツと妻を振りかへつて、

「オイ自動車で行くぞ」と云つた、妻は思はずニコツとした、子供は「自動車、自動車」と足をトク／＼させて喜びを張り上げた。

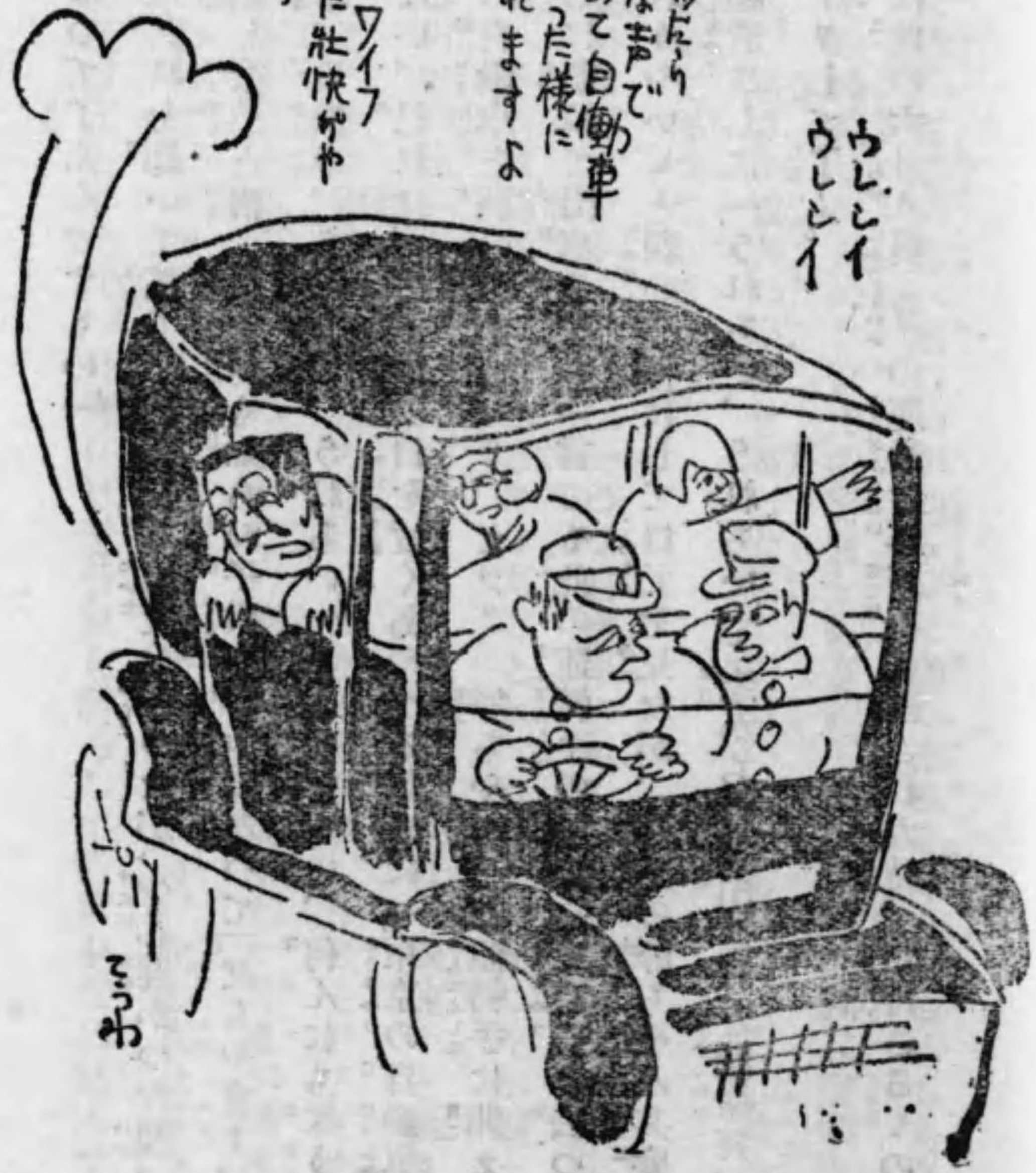
自動車は早くも眼の前に横付けにされた。帽子を脱いでうやくしく乗車を待つ運轉手に一瞥を呉れて三人ヒラリと乗り込むが早い己れは天上天下我が物顔にフンゾリ返つて、自分が臍切つて始めて此塵長距離殊に箱根通ひと云ふ紳名ある法外な値段で有名な自動車を何等の躊躇なしに雇ふたものだから、嬉しくて堪らず、乗るが早いか思はず嬉しさに大聲あげて、

「君、オイ妻ッ、實に壯快ぢやないか、此塵壯快な場面を須らく近所の人に見て貰ひたいものだなア、え君、君も然う思はぬか」と顔を覗く様になると、妻は眼で烈しく其れをシツ／＼と制しながら、黙つて運轉手を指さし、密つと口を耳元へ寄せて「私共は始めて自動車に乗つた様に思はれてよ、少つとも估券を考へて下さらないで直ぐ有頂

うれし  
うれし  
イ

大きき声で  
はじめて自動車  
に乗った様に  
思はれますよ

オイワイフ  
由良ト壯快ぢや  
ないか



天になつて了ふんですもの」

己れは其れを聴いて慌て、悠然たる態度を作つたが、少し遅かつた哩。幾程然し豪然と構へても何も知らぬ子供は夢中になつて「父ちやまよ、自動車、自動車、うれちい、うれちい」の連發だもの、何んにもなりやしない。己れは百方子供の口を旨くあやつる爲めに「東京の自動車と此の自動車と孰つちがい？」えッ？ 静ちやん」と運轉手に聞えよがしに訊ねて出来るなら一言でも此の運轉手の前で「東京」と云つて呉れりやいと親心一杯にして口元を見たが、肝心の静ちやん其慶事に頓着なしに「うれちい、うれちい」と窓から首を出さうと懸命だ、ウンザリして了ふ。

己れは此の六月A商會の運動會が箱根に催された時、招待さるゝの

光榮に浴して塔の澤へ来たのが抑々音に聴く箱根を知つた始めてである。その時或は長尾峠に富士の秀麗を仰ぎ視、或は強羅公園に晝寢と洒落れ、具さに感興の限りを盡した思出の多い旅であつた。それ故少くも經驗を持つてゐる。

妻は始めてだ、だから己れは一つは運轉手に對し、此の己れは年が年中暇さへあれば箱根へ來てゐる身分だぞと云はぬ許りに知つたか振りに酒匂川で御座い小田原で御座い、こゝは箱根の入口で御座いと振り廻すこと、振り廻すこと。塔の澤はまだかと訊かれ、ツイそれ／＼あすこに家が見えるだろ、あの邊が塔の澤だと折角説明した其處が湯本であつたので、オヤ／＼とばかり眼をバチツカせたり、化の皮は片ツ端から脱げて行くので、仕舞には悉皆氣を腐らして假寢を定め込んで

防禦して了ふ。

塔の澤は新玉の湯の前で下ろされ「部屋があるか」と訊ねると、

「困りました」と主人は頭掻く。

「此處を頼りにして来たんだから是非都合して呉れ、己れはソラつい先達来たんだから」と髯面ヌツと突き出して、此の顔に覺えがないかと許り。

「それぢや茶の間で一寸お待ち下さい、直ぐ御出發になる方がありませんから」

と云ふ。ヤレ／＼と重荷を下ろした様な氣で登り込んだ。

さア妻は一つとして氣に入らざるは無い。國府津の宿とは違ひ、部屋の美しさ景色のよさ、温泉のなめらかさ、客種のよさに此の上の望み

は無いと云ふ満悅を示し、

「もう私も箱根へ来たと云へば他人に肩幅も廣いわ、感謝します、ねえ貴方」

と云つて倚りかゝつて来ようとするので、己れは慌て、

「馬鹿ッ、何を云つてるんだい、後を見い、後を」と首で知らした。

其處には女中がニコ／＼して立つてゐたので妻は思はず氣極り悪さに少しく顔を赤らめて「オホ、オホ、オホ……」と一寸參つたらしい。

ピタリ／＼と逢ふ女中毎に「まアよく被居いました」と、なつかし相に挨拶して呉れるので、己れも全つきり變つた知らぬ宿に泊まつた氣は微塵も浮ばず、親味は家へ對して人へ對して油然と湧いて来る。

「まアお嬢さま、可愛いのねえ」と各自に争ふて静子を抱いて機嫌